2

COVER ILLUSTRATION ◤あなたのおなまえを書いてね

Lagado、川鵜鶏肋、Fukapon、なぎ

いないワタシのキモチ

mnfikmʌhk

CREATURE MIXING

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 2
Mitei

2008年11月16日　初 版 発 行
2008年11月22日　第 2 版発行

発行所　まにふいくみやはか
http://www.projectkaigo.org/

印刷／製本　project KAIGO東川口分室

Copyright(C) 2008 川鵜鶏肋，Lagado，Fukapon，なぎ，まにふいくみやはか

この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/ をご覧ください。

――未定、故に

わからないことは、たくさんある。
明日も、今日も。昨日も。

難解辛苦 テーマが悪いと思いました

川鵜鶏肋

いかにも超実験作な拙作は、お題に悩んだ挙げ句ネタ置き場から引っ張り出してきた設定を元にしております。「まお＆えりか」の他にもあと七組いるらしいです。なお、usermod コマンドの -a は属性（attribute）テーブルで、すでにある同系統属性を上書きしますが、明示しなかった属性が消えるわけではありません。消すときは明示的に --a を用います。

ではまたどこかでお会いできれば……

Lagado

人間の「無意識」が創造したもののうち、カタチに残らないものは「夢」。ではカタチに残るものは何か。思うに、翻訳ソフトで自動生成される狂気じみた似非日本語だろうか。

http://www.k3.dion.ne.jp/~lagado/

Fukapon

花羽に怒られそうだよぅ。品質出てなくてごめんなさい。原因は、お察しの通りです。「やおい」なのも、もう、ごめんなさいとしか言いようが……。

前回はテーマに対して真っ直ぐの球（のつもり）だったので、今回はお得意の誰にもわからない変化球。ホントにわかんないよね、もう一度謝ろ。ごめんなさい……。

もちろんお気に入りは花羽。せっかくのロリっ娘なのに出番少なし。みゅぅ。

http://www.fukapon.com/

なぎ

相変わらず、締め切りぶっちぎりで申し訳ありません。今回お題には結構忠実に書いてみましたが、いかんせん実力がまだまだ足りないようで展開に無理があったり、本筋と全く関係ないことで文量を増やしてたりと、酷いものです。反省をいかせるよう努力して参ります。年末から２月にかけてのイベントについても掌編を書いていく予定です。

レイアウト

今、15日の29時26分。まだ未入稿の原稿があるんだって。

印刷・製本

COMITIAでよかったよ。だって、朝、ゆっくりだもんね。

http://www.projectkaigo.org/

CONTENTS

トラブル・ドリフト 川鵜鶏肋 …… **03**

Mad as a March hare Lagado …… **27**

今日、世界を取り戻します Fukapon …… **31**

名称未制定惑星 なぎ …… **75**

難解辛苦 …… **79**

CREATURE MIXING

mnfikmyhk/2/Mitei

トラブル・ドリフト

川鵜鶏肋

login:spectator
password:********
[spectator@August25 /Tamasaka/Hinari's house/Mao's room]$

眼鏡の少女は原稿用紙の束を前に途方に暮れていた。
何も受験生に夏休みの宿題を出すことはないだろう。
作文。
しかも最低で四百字詰め二十枚分を要求されている。
最悪なのが、
「自叙伝って……」
書く事がないのだ。
自分の平凡さを否応なく思い知らされる。なんたる残酷な仕打ちだろうか。
飛成麻緒（ひなりまお）、中学三年生。
平凡を絵に描いて熨斗をつけて額に飾ったような飛成家だ。変わってるのは名字ぐらいのものだし、それにしたって特に伝説が残っているわけでもない。
「十年そこそこしか生きてない中学生に何を期待してるんだか」
父は平凡なサラリーマン。母は平凡な専業主婦。地方都市のさらに田舎、ローンのたっぷり残った平屋一戸建てに居住。
一人娘の麻緒は近くの私立中学に通う。バスや自転車は許されないが歩くのもきつい半端な距離を徒歩通学。
半端な長さのスカートの制服がダサいが、弱気な麻緒にはあえてアレンジして着るような勇気はない。足りない背丈に十人並みのスタイルに平凡な顔立ち（&ド近眼でビン底メガネ）では、自己主張してみたところでイタいだけだろう事はよくわかっている。
成績も可もなく不可もなく。このままいけば近場の私立高校（都合がいいことにハイレベルの進学校でもなければ不良の巣窟でもない）への進級を狙う事になるだろう。
そんな麻緒が自叙伝なんて大袈裟なものを書けるほどのネタを持ちあわせているわけもなく。
過去を共謀捏造できるようなつき合いの古い友人がいるわけでもなく。
絵日記化してページを稼ごうにも絵心なんかなく。
ここはせめて捻るしかないと決心した麻緒はおもむろに筆を執ると、
「ええと……『おくさまの名前は麻紀、だんなさまの名前は吉雄、ごく普通の二人はごく普通に見合いしてごく普通の結婚をしました。奥様が麿（まろ）だったりしません。娘もごく普通の中学生です』」
表現だけは精一杯大袈裟に脚色し、ラストでは一か八かの大技まで投入してなんとか規定の枚数を埋め終えたのであった。

$ su Mao
[Mao@September12 /Tamasaka/Tosawa gakuen junior high school/Classroom3-C]$

新学期に返却された原稿用紙に赤ペンで書き込まれた評が実にふるっていた。

2009-05-31/SNDI
will be released

次号未定
決まってるってば、出ます。
テーマは募集中、名案求む。

mCMX 3
http://www.projectkaigo.org/

『冗談に紛らせた行間から不安感が伝わってきます。学校生活にも家庭生活にも問題があって当然です。昨今の中学生であれば心の中に殺伐としたなにかを抱えているはずです。話すだけでも楽になりますよ。相談ならいつでも大歓迎です』

「……あはは、相変わらず先入観にこりかたまってるね、あのおっさんは」

鋭いと言えば鋭いが、きっと乱射のまぐれ当たりに近い。

平凡なのはもう嫌、簡単確実に非凡になれる方法が知りたい、なんて悩みを想定しているとは到底思えなかった。

『p.s. 分からないことが二つ。最後のページの不思議な図版は妖怪か何かですか？ 〝このお話はフィクションであり実在の人物団体とは一切関係ありません〟、は悪質なジョークとして、吹き出しの中の〝お姉ちゃんにお願いしたけど出演断られました〟って台詞はどういう意味でしょうか？』

「可愛い妹なのに」

認めよう。あまり可愛くない。人生初イラストとしては難易度高すぎたのは認める。しかし妖怪とは何事だろう。

いや、才能迸るイラストも、『次女出ん』、という高度なジョークもあのオッサンにとっては難解すぎたのだ。きっとそうだ。

きっと。

……

似合わない真似をやるものじゃなかった。

```
$ su spectator
[spectator@November18 /Tamasaka/Hinari's house/dining
room]$
```

そして十一月。

「模擬テスト偏差値ぴったり50。光鷹（みつたか）だの珠附紫城（たまふしじょう）だの贅沢は言えないが、万戸屋（まとや）の上は射程範囲か。さすが俺たちの子供、実に平凡だ」

「でもせめて健康管理はきちんとね。麻緒は遠足とか旅行とか、ここぞって時に決まって体調を崩すんだから。進級試験の直前とか当日とか風邪引いたら目も当てられないわよ」

「五分五分ならあとは神頼みだな。ほら、これは父さんからだ」

「これは母さんからね」

```
$ su Mao
[Mao@September12 /Tamasaka/Kaburagi-cho]$
```

両親からそれぞれ五百円玉を受け取った麻緒は、近所の神社に向かっていた。

ちょっと遠回りになるが、学校帰りに立ち寄るには都合がいい。

……わたしゃ無宗教なんだけどな。

表向き浄土真宗で先祖代々の墓参りにもいくが、実際のところは一家揃って無宗教といっていい。

いや、無宗教だからこそ臆面もなく神頼みできるのだが。

漫画単行本二冊分。

賽銭箱に入れるにはちょっと心が揺れる額だが、これを使ってしまって進級試験に滑ったら絶対後悔するだろう。エスカレーターとはいえ三分の一は外部受験組と入れ替わるのだから。

因果関係が無いことが証明できないものは、起こってしまってからは限りなくクロと同じなのだ。真実はどうあれ精神的には。

かといってバス賃を使ってまで、専門家（スペシャリスト）にお願いしにいくのも関係ないことだと思いますよ」

「まあ、めんどくさいし」

一瞬考えてそう答えた。

「結局それがですか」

名前を決めないまま僕はこの星を立ち去ることを決めた。さようならもう二度と来ることのない星。願わくば自分たちの星の名前を決められますように。

この惑星ないで自星の名前が統一されたのはこの調査官の死後となった。付けられた名前を連邦に登録されたのは更に後のことである。

じゃまくさい（天神さんは街の正反対側だ）。
むしろお願いが少ない神様の方が余裕があるかもしれないし、真剣に願いを聞いてくれるかもしれない。
知識に乏しいのをいいことに適当に曲解してみると、それでなんとなく安心できる。こういうところ、自分でも小市民と思える。
そしてたどり着いたのは存在だけは保育園時代から知っている小さな神社。何が祀られているのかなど知るはずもないが、まがりなりにも神様なら本格的な受験はともかく小娘一人分の進級試験の支援ぐらい可能だろう。
敷地は狭いが、やたら高密度に鬱蒼と茂った背の高い木々に囲まれ昼なお薄暗い。
「！」
鳥居をくぐった瞬間に感じる独特の空気と匂い。空気の密度の高さ。プレッシャー。無礼な行為を封じるための結界。
息を呑まずにいられない。
一歩ごとに靴が潜り込むほどに分厚く降り積もった落ち葉の絨毯も、また人を遠ざける力を備えている。
昔の人が知恵を絞り、視覚や音響効果に訴え、巧みにそういう空間を作ってあるのだと分かっていても……
「やばそう」な雰囲気。
「なんかいる」気配。
寒気を感じて身体を震わせたその瞬間、
「いらっしゃい」
「うひぅ⁉」
本当になんかいた。
背後からかけられた声に、麻緒は鞄を放り出して飛び上がる事になった。
振り向くと同時に、落ち葉を巻き上げつつたっぷり三メートルは後ずさる。
「よっと」
声の主、糸目の青年は慌てず騒がず手を伸ばし、宙を舞う鞄をキャッチした。
「驚かせてしまいましたか、これは申し訳ありません」
鞄を渡された後もまだ驚きの余韻に支配されており、反射的にカクカクと頷くことしかできない。
「受験生とお見受けしますが、残念ながら当社では合格祈願の絵馬や御札などは扱っておりません」
「あ…あの、その……」
白衣と水色の袴。神職らしい。
「お引き取りを、と申し上げたいところですが……」
青年はにこりと微笑み、
「貴女は面白い縁をお持ちのようです。少しおつきあいいただけますか？」
「は、はあ……はい」

```
$ cd shrine
```

「申し遅れました。本社の管理を任されております、梶木と申します」
社務所でお茶をごちそうになることになった。
「あ、飛成、飛成麻緒です」
「ひなりまお、殿……ですか。なるほど」
糸目をさらに細め、梶木は微笑んだ。

「あの地球ってなんで地球って言うか知ってますか」
ナンパの台詞としても奇妙なことを聞かれ動揺して正直に答えてしまう。
「さあ、地面の地に球だから丸い地面って意味なんじゃない？」
「そうなんですか。ありがとうございました」
さも初めて知ったかのように男の子は答えた。一礼してそのまま立ち去ろうとする男の子に私はなぜか声をかけてしまっていた。
「あの、私も聞きたいことがあるんですが」
「なんですか？」
男の子は振り返って答えた。
「私ってなんなんでしょね。今まで自分なりに一生懸命生きて働いて恋愛したわけですけど、今の自分は働いてないし恋人も子供もいない。ただの無職で社会から消されていく存在なのかもしれない。こんな私はなんて呼ばれればいいんですか？」
それは誰かに聞いて欲しかったことなのかもしれない。答えが欲しかったわけじゃなかった。
「名前なんて、そんなに意味のあるものなんすかね」
うるさいくらい油蝉が鳴く中、彼の声は不思議とはっきり聞こえた。男の子は続けた。
「それよりも、自分が何をやって生きてきたかの方が大切なんじゃないですか。まあ、決まっていないなら『未定』とでも書いておけばいいんじゃないですか？」
もう答えたそういった男の子は背を向けて歩いて行った。私は急に眠くなり意識を失っていった。
子供達の遊ぶ声で目が覚めた。知らないうちに眠ってしまっていたようだった。夢の誰かと話していたような気がする。
私は立ち上がり、バス停に向かった。帰ってやることは決めていたアンケートはがきの職業欄には堂々と『未定』と書くことである。
「全く、いつも通り名前の付けられない星だったよ」
自分の船に戻るなりそうつぶやいた。
「独り言ですが。長期間に渡る調査生活が心に影響を及ぼしていますね」
統括システムのインタフェースが皮肉を返してくる。
自分の仕事である惑星調査官という仕事は閑職である。公務員として安定した手当が支給される一方、長期間にわたる勤務中は広いとはいえない船内で一人で生活しなければならないという孤独で拘束時間の長い仕事だからである。
その上、拡大し続けた汎銀河連邦の内部が拡大の影響により、統制が保てなくなりつつあり、私が誕生する前から知的生命体を発見しても原則アプローチを行わないこととなっており達成感にも乏しい。
「また名前の無い星として報告するつもりですか。怒られますよ。」
調査官には、知的生命体が居住している惑星があればそこに降り立ち、その星の名前を調査する義務がある。ところがだいたい惑星で自分たちの住む星の名前が統一されておらず、その際には惑星調査官が惑星の名称を決めることとなっている。
「あなたが勝手に名前を付けたところで、住んでいる人たちには

「神ならぬ私にもはっきりわかります。貴女はまれに見る恵まれた運命の持ち主です」
「あの、いかにも平凡な中学生なんですけど」
皮肉にしか聞こえない。
「それは喜ぶべき事なのですよ。今後もずっと、平凡で退屈で孤独でも堅実な一生が保証されているのですから」
「一生!?」
優れた才能や幸運の持ち主を見るたび、自らのどうしようもない平凡さに、常に歯がゆさを感じ続けていた。いつかは何かが変わるかもしれないという一縷の希望を抱きながらこれまで生きて生きた。
そしてたった今、希望はないと聖職者に断言されてしまったのである。
「私の人生、山なし落ちなし意味なし確定かぁ……」
「おや、ご不満と見えますね」
神主は不思議そうに言う。
「不満とまでは言わないですけど、贅沢だってわかってますけどね……はあ、がっくし」
「まあまあ……そうだ」
良いことを思いついた、とばかりに、梶木は掌を打つ。
「それでもなお非凡な人生を望まれるというのなら、御御籤など引いてゆかれるというのは？」
「え？」
「占いは未来を予見するものであると同時に、未来を選び取る手段でもあります。これをきっかけに、波瀾万丈の華々しい運命が開かれるかもしれませんよ。ええ、ほんの千円です。消費税はサービスしておきますよ」
ポケットに手を入れると五百円玉が二枚。
……ああ、流されてる、流されてる。
ここまでの流れの全てがおきまりの演出なのだろうが……騙されてると分かっていても引き下がれない。
神頼みに来たのだから。
「引く。引きます。引かいでかっ！」
麻緒は一も二もなく決断した。
「ご随意に」
神主は優雅に一礼すると、
「はい、これを一本選んで抜きます」
細い棒のささった大きな筒を差し出した。
「いや、一本しか出てないんですが」
「沢山あったら都合悪い目が出るかもしれないでしょう」
「なるほど」
一理ある。
手を伸ばすと、筒が引かれる。
「あのー」
「千円」
糸目の神主はあくまでもにこやかな表情を崩さない。
「まいどありー」
「はいはい」
引き抜いたのは何の変哲もないただの棒。
眺め回してみたが、文字の一つも書いてないし先に色がついているわけでもない。
「あれ？　抜けちゃいましたね」

名称未制定惑星

なぎ

「名前なんて、そんなに意味のあるものなんですかね。」
うるさいくらい油蝉が鳴く中、彼の声は不思議とはっきり聞こえた。

その公園に来たのは不運と偶然の重なりだった。会社を辞めて実家に戻ってきてから三ヶ月、インターネットと読書のループにも飽きて最近は昼間は外出することが多い。とはいったものの、無職でたいした蓄えもない私には、外出と行っても書店や図書館、ブックオフで本を読んだり、ウィンドウショッピングをするくらいである。
免許でも持っていれば観光地巡りも出来るのだが、東京に住んでいたときには必要性を感じていなかったし、必要があれば彼(正確には元彼)がレンタカーで連れて行ってくれたので持っていない。
軽い気持ちで地元に帰ってきたものの短大を卒業してからの十年以上住んでないうえ、元来人に連絡するのも苦手であり、当時の友人知人もほとんどいない。地元の公園やら公民館に行けば、自分と同年代の『母親』たちが、子供連れでいたりするわけで昔の知り合いにあってしまうというリスクを考えて隣町に外出することにしていた。
実家のある住んでいる町から電車で三駅の県の商都ともよばれる郡山市、私は高校から短大までの五年間を過ごした
駅に着くと、自分の出身校を見てみたいと思い立ち勘を頼りにバスに乗ってみた。
ところが、バスのテープからは一向に出身校名前などは流れず、町外れの住宅街まで来てしまった。慌ててバスを降りての歩き出してはみたがよく考えてみれば終点まで乗ってそのまま戻ってくればよかったのかもしれないがあとの祭りである。
ただでさえ、地方の住宅街なんて人がいないのに真夏の午後二時、陽炎でゆらめく道路には車は通れども人はいない。人を探してあてもなく歩いてその公園にたどり着いた。
夕方にもなって涼しくなれば子供が遊び出すのかもしれないが、炎天下の中で遊ぼうという元気のいい子供達はいないようで、公園は無人だった。
木陰に入っているベンチに腰を下ろし休憩する。日焼け止めを塗っているとはいってもこの日差しの中に小一時間いればダメージは避けられない。三十歳を過ぎてから肌へのダメージを切々と感じるようになった。
「すみません、うかがいたいことがあるのですが」
視線を上に上げると、一人の男の子が立っていた。男の子と言っても自分の年齢から下という意味で、たぶん二十台前半と言ったところ。Tシャツとジーンズは清潔な感じで好印象だけれど、真っ白な肌は良くて学生もしくはニートといったところだろうか。
「はい？」
質問をしたい状況にあるのは私の方だったが、尋ねられれば返事をしないわけにもいかない。

「玲香ちゃんの初恋って、いつ？」
「え？　あの、その、えっと、中学二年のとき……」
　玲香はそんなことを言われるとは思いもよらず、ためらいながらもついつい、答えてしまう。その素直さは彼女らしいと、翔子もついつい、彼女をからかいたくなるが、今は抑えて続けた。
「相手は？　……総ちゃんでしょ？」
「っ！　そ、そんなわけないじゃないですかっ！」
（ホント、わかりやすいんだから）
　翔子は自制の意味も込め、問い詰めるのではなく、自らの話をすることで核心へと進むことにする。視線を彼女から外し、高い青空に移して。
「私ね、遅かったのよ。二十八だったから、ちょうど今の玲香ちゃんくらいのとき」
　玲香は驚きを隠せず顔に出してしまう。
　そのことに自身で気付いた彼女が謝ろうとするのを制すべく、翔子は続きを発した。
「なんでこんなに個人差があるか、考えたことある？」
　戻された視線が、玲香に答えを求める。
　玲香はうーんと真剣に考えているようだが、答えまでは遠そうな感じだ。
「ごめんなさい、わかりません……」
「いいの、答えなんか誰にもわからないんだから。だから、これは私の意見ね。個人差がある理由は、恋が学習の結果だから。恋愛は自然にできるようになったりはしないんじゃないかしら」
「ぁ、それって……」
　玲香は突然ひらめいたように、パッと目を見開き、翔子を見つめた。
　翔子はゆっくりと、頷いた。
「そう。私たちは恋心を取り戻すことに成功したのよ。あとは、恋愛を教えてあげればいい」
「でもどうやって？」
　前のめりに問うてくる玲香に、翔子は少し困りながら。いつもの調子で、玲香に答えた。
「お手本を見せてあげるのが教育のファーストステップでしょう？」
　人差し指を立て、「1」を表す彼女の左手。
　薬指には、プラチナの指輪。
「片想いの人のところ、行ってきなさい。私も一緒に、がんばるから」
　翔子の表情には少しばかりの恐怖が混じっていた。けれども、いつも通りの笑顔で、非常口を開いた。真っ新なコートが北風に翻されながら、鉄扉の向こうへと消える。
「こんな気持ち、取り戻してよかったのかな……」
　残された玲香は、高く深い青空を仰いだ。

「……なんか抜けるのがおかしいみたいな言い方」
「いいえ……まあ……ご愁傷様」
　乾いた笑みと呟くような語尾が無性に気になった。
「斯くなる上は強く生きてください。私もできるかぎりのフォローはさせてもらいます」
「どうゆう意味ですかねそれは」
　自分で唆しておきながら、全部終わってしまってからしっかりと不安を煽ってくれた。

```
$ su Lattis
$ usermod -G BP3,Hinari Mao
$ usermod -a "Mao's sister" -G Hinari -l Marin Kajiki
$ su Mao
$ cd /Tamasaka/Hinari's house
[Mao@November18 /Tamasaka/Hinari's house]$
```

「ただいまー」
「お帰りです、お姉ちゃん」
　階段上からひょいと顔を覗かせて麻緒を迎えたのは二つ下の妹、麻鈴（まりん）だった。
　私よりさらに一回り小柄な身体にツインテールといかにも子供っぽいが、いつもにこやかに柔らかい笑顔を崩さず、一歩引いて他人をたてる。見た目と年齢の割にはいやに落ち着いた態度の少女だ。
　端的に言えば、ロリっ娘の皮をかぶったおばさん。
　妹と共用の部屋で着替えつつ、麻緒は間仕切りのカーテン越しに問いかけた。
「ねー麻鈴」
「んー？」
「鏑木町の端の小さい神社、知ってる？」
「ええ知ってます」
　妹は応える。
「じゃあさ、あそこの祭神とか御神体って聞いたことある？」
「阿邪爾那姫（あざになひめ）」
　即答。訊いてみるものだ。
　麻鈴は宗教学だの民俗学だのやたら渋い趣味の持ち主である。ローカルなネタについてもきっちり調べていたようだ。
「へえ、女神様なんだ。聞いたことないけど」
「土蜘蛛の首領の名前の一つですけれど……名を借りているだけで、実際に祭られているのは似たような属性の全然別の存在（モノ）です。あ、ご神体は剣ですね」
「ふうん。女神なのに剣なんだ。勝負事に勝たせてくれるとか、そんな御利益なのかな？」
「勝負事にも効果がありますが……お姉ちゃんが思ってるようなのとはちょっと違います」
「どういう風に？」
「とにかく面白い展開が約束されます」
「は？」
「帰りに転んで足を引きずって家につくと、近所からお見舞いにメロンをもらったりします。それを喜んで食べたらお腹をこわしてみたり」
　つっこみどころ満載。即つっこむ。
「うわ、カンベン。要するに人のトラブルを見て楽しむんだ。そ

れだと全然メリットないじゃん」
　声をあげてカーテンを引きあけると、麻鈴は万年ニコ目をいっそう細め、微笑ましそうに笑っていた。
「……姫とお姉ちゃんとの間にはしっかり縁ができてますよ」
「えー」
「お参りした上に籤まで引いてきたんですからね」
「籤？　わたしは籤なんてひいてないけど」
「そうでしたか、失礼しました。でも問題はありませんでしょう？　平凡で退屈で孤独で堅実な一生には興味がないと仰ってたじゃありませんか。」
「えー」
　確かに地味で独りぼっちは嫌だが、麻緒とてなにもトラブルを望んでいるわけではないのだ。
「残念ながらクーリングオフは受け付けておりません」
　そんなことをにこやかに言う。
「有効期限は？」
「姫が飽きるまで」
orz
　そりゃそうだ。古代の神様との契約にそういう近代的な概念があるとは思えない。
「そっか、まずったかなー。あそこ、いかにも不親切だったしね。誰もいないどころか案内板もなかったもんね。知らないうちにお参りさせるとか、そういう罠なんだ」
「これはもう、楽しんだ方が勝ちですね。私も温かく見守ってますから」
「他人事だと思って～」
　もちろんこんなのは軽口で、麻緒自身本気にしていたわけではなかったのだが……
「ナントカ姫さんナントカ姫さん、薄情な妹だけじゃ辛いっす。せめて頼りがいのある友達ぐらいおまけして。なむ～」
「それ、仏教ですから。たぶん」

```
$ su spectator
[spectator@March3 root]$
```

　その後。
　実力なのか姫の加護なのか、とにもかくにも麻緒は志望校に合格した。

```
$ su Mao
$ groupadd -g kagari
$ useradd -a "Mao's buddy","in the sheath" -g BP3 -G
Kagari Elica
$ usermod -a coterie-writer Mao
[Mao@April4(Monday) /Tamasaka/Hinari's house/Mao&Marin's
room]$
```

「おねえちゃん、起きてください」
　ゆさゆさと体を揺らされる。
「ん～？　おは～」
　目を開くと、ニコ目に困り眉がとび込んできた。
「……ねむ」
「夜中まで漫画描いてるからですよ」
　じゃっ。

えると、過去一週間と同じなのはさすがにまずい」
「効果が出るのが遅れている、とか……」
「可能性はあるが、予測値と異なる事実に変わりはない。現実的な見方としては、失敗という結論に至る可能性の方が高い」
「失敗」という言葉に、玲香は戸惑いを覚える。
　このプロジェクトのゴールは「正しい世界の奪還」。プログラムの完走はそのための手段でしかなく、喜ぶのはまだ早かったのだ。
　彼女も頭ではそのことをわかっているが、みなが必死で、艱難辛苦を乗り越えて今に漕ぎ着けた事実は身体が覚えていた。否定などできるはずもない。
「総一は悲観しすぎよ。大丈夫です、私たちの書いたプログラムは、完走したんです」
　彼女と総一の間に割って入った花羽が、まさに玲香が思いたかったことを言葉にしてくれる。
（そうよ、きっと大丈夫。私たち、がんばったもの）
　玲香だけでなく、周りの人間もそう思いたかったろう。しかし今、周りにいるのは各チームのリーダとプロジェクトマネージャ。現実を正しく捕らえる能力に、長けた者ばかりだ。
　故に悲観的ではなく、感情を廃した判断をすることもできる。
「ビーコンの設置方法から言って、主に効果が出るのは本日も出勤している社会人です。平日昼間である現在、値に変化がないのは予測シナリオの一つでもあります」
　片手に持ち続けているワイングラスが説得力を低下させているものの、定信の判断は適当だ。
「成否を待つ不安で悲観論を助長させる必要はありません。私たちにできることはやりました。あとは予定通り夜半まで、結論を待ちましょう」
　強い口調で放たれた彼の言葉も、場に笑顔を取り戻すことはできなかった。
　それでもみな、雑然と並べられていた飲食物に再び手を伸ばし、今は明るくいようと努めた。
――失敗という結論に至る可能性の方が高い。
　冷たい風に当たり、玲香は考えを巡らせていた。
（プログラムが正常に完走したとすれば、みんなの気持ちは取り戻せたはず）
　もう数え切れぬほど飲んだ、甘ったるいミルクティーに口を付け。
（それでも世界が戻らない理由は、何？）
　気付かぬうちに間に冷めてしまっていた液体を嚥下する。
「この非常階段から見える街は、変わらないわね」
「翔子さん」
　気付くと後ろには、翔子が立っていた。
「あら、お仕事中なのね。まぁ、考えていることは同じかしら」
　今朝から着ているワンピースが、北風に吹かれ、はためいている。
「ちょうどいいわ、話があるの」
　彼女はそう言いながら、片手に持っていたコートを着込んだ。そして、一歩進み、玲香に並んで。
　穏やかな笑顔の中に鋭さを伴い、仕事中をちょうどいいといった彼女が、玲香に問いかける。

ったように静まりかえった。
まだマイクを握っている定信は、にやりと満足げな表情で、妙な間を経て口を開いた。
「本日は十五時ちょうどに一斉退社、身なりを整えた上で外出することを命じます。クリスマスイヴのアフターファイブ、それこそが我々最後の大仕事です！」
——おーっ
——ヒャッホゥイーッ！
——脅かすなよー
——なんか食いもんきたー
定信のわざとらしい演出に玲香も笑みをこぼしながら、気付けば目の前に運ばれてきた料理と酒に肩をすくめざるを得ない。
「私、聞いてませんよ？」
「折り目正しい早川さんに言っては、こんな高いワインを何本も頼めませんからね」
定信はいつの間にかマイクをワインボトルに持ち替えたらしく、片手では総一から栓抜きを受け取っている。
「はぁ……。私、そんなに堅物じゃありませんよぅ」
「ならいいですね。これが一本、二万円ほどでも」
「ふぇえっ？　そ、それ、ちょっと高くないですか？」
玲香の反応にもお構いなしに、栓を開けたワインをグラスに注いでいた。
プロジェクトの金銭管理は主に定信の担当だったが、そんなに余裕がないことは玲香も知っている。ではこの無駄遣いはどこから、と場に似合わぬ疑問を抱いていると、今度は横から翔子の声。
「あらぁ、玲香ちゃん。ワインは高いものなのよ？」
そう言いながら笑う彼女の左手には、泡の出る液体が注がれたグラス。
何となく想像がついてしまったものの、玲香は念のために確認した。
「翔子さん、それ、何ですか」
「クリュッグ・ヴィンテージ。高いのよ？　これ」
「はぁ……」
銘柄を言われてもさっぱりわからない玲香だが、おそらく、シャンパン。その美しすぎる液体を見つめながら、溜息をついているのは玲香ぐらいだろう。それほどまでにフロアは、明るく、沸いている。
しかし、三十分もすると、その溜息は稼働状況を監視する面々に広まり出した。
「どうしたの？」
フロアを一回りしてきた玲香が総一に声をかけると、眉間に皺を寄せた渋い表情が状況を説明する。
「あがってくる観測結果が思わしくない」
そう言いながら彼は、玲香を端末に呼び寄せる。端末には三本の折れ線グラフが描かれていた。
「青が過去一週間の実測平均、黄色が監視カメラから拾った三年前の値、赤が現在の実測値」
念のためと総一は説明を続けるが、グラフの示すものがわかった時点で、玲香にも状況が理解できた。
「過去一週間と全く変化がない。平日の昼間であることから露骨に変化は出ないだろうが、三年前の値が明らかに高いことを踏ま

麻鈴がカーテンを引き開けると同時に朝日が部屋を満たす。眩しい。
「って、あんたもアシやってくれてたじゃん」
2時間寝てないはず。タフだ。
「たすかったよ。いやー、サークル主宰が落とすわけにゃいかんでしょ」
「引き替えに初日から高校に遅刻しますよ。さ、早く起きて着替えましょう」
「あんたお母さんか……ってゆうか、まるでいいとこの婆やみたいだ」
「ではお嬢様、お着替えをお早く」
「いや、ノらなくていいから」

$ cd /Tamasaka/Hinari's house/entrance

麻鈴と家を出たと同時にお隣の炬家のドアが開き、同じ真新しいセーラー服が姿をあらわした。
「おー、おはよー」
「おはようございます、絵莉華さん」
ひらひらと手を振ってみせる。麻鈴は律儀に足を止め、深々と一礼。
「おはよう、麻緒・麻鈴ちゃん」
満面の笑みとともに小走りで隣に並んできたが、すっと距離をとる。
幼稚園来のつきあいで親友と言っていいが、この絵莉華と並んで歩くのにはどうにも抵抗がある。
なにしろ規格外の美少女、ちゅうか美人さん。
シャープさと華やかさを兼ね備え、ちょっと中性的な雰囲気もある。
「もう、意地悪ね」
と眉根を寄せる表情だけで、同性の麻緒さえ動揺させるほどだ。
「……どっちが意地悪だっての。知ってる？　美人の隣にはブスがつきものなんだそうよ」
身長はやや高めといった程度だが、顔が小さく手足が長い。マネキン人形みたいな体型。
ちょっと強情そうなところのあるロングヘアは、それこそ闇のような深い漆黒。
容姿も存在感も、こいつのどのへんが同じ年の新入生なのかと小一時間問い詰めたくなるぐらいの正直詐欺レベル。漫画の登場人物かっての。
対する自分は小さい方から数えた方が早い。容姿十人並み。ダサメガネ付き。
隣に立ちたくないのも分かってもらえるだろう。
「お姉ちゃん、ヒネ過ぎです。せっかく絵莉華さんと同じ学校に行けたんですから、素直に喜んでください」
十分可愛い奴に言われたくない。
「どこでも行けたくせに、漫画描くしか能のないバカと同じエスカレーターに乗って。そんでもってチンチクリンのダサメガネにくっついて歩いて。これを手の込んだ嫌がらせと言わずして何と言おう」
「……うわ、ツンデレです」
「ツンデレ違う。自分の意思じゃないところで勝手に借り作られたっていうか、足引っ張ってるみたいで気分悪いだけ。嬉しいか

どうかは別問題」
「ごめんね勝手して」
たちまち絵莉華がしゅんとする。
「つまり嬉しいんですよね」
押しの強い妹が、にこにこだけでプレッシャーをかけてくる。
笑顔の魔法、というより笑顔の呪いだなこりゃ。
「う……嬉しくないとは言ってないけど」
「なら借りとか思わなくていいから。私が麻緒と一緒にいたいんだし、そもそも麻緒が望んでくれなかったら私はここに居られなかったんだから。麻緒から離れちゃ生きている意味がないよ」
「これまた大胆発言ですねえ」
テンションの急上昇した美人さんが余計にプレッシャーをかけてくれる。そして妹がかき回す。
ああ、言った。確かに言いましたよ。ずっと友達だって。
そりゃそうでしょ。その日出会ったばかりの人間を身体をはって庇ってくれた相手のお願いを断れる筈がない。子供心にも、「ああ、この娘は本当にいい娘なんだ」ってわかったから。
「そこまで言われてダメとは言えないよ」
それから少しでも借りを返そうとはしたけれど……借りばっかりがどんどん積み上がっていった。あの日から絵莉華の身には生傷がたえることなく、そのほとんどがドジでのろまで要領の悪い麻緒を庇ってできたものだった。
彼女はまるで麻緒の騎士だった。
もちろん、麻緒はそんな絵莉華が大好きで誇りに思っていたが、心の中には申し訳なさが常にある。
「でも、並んじゃうと私がいかにも見劣りするのは事実だからねえ」
確かに絵莉華に劣等感を感じることはあり、それが麻緒の悩みの種の一つではあるが、せいぜい軽口にのせられる程度のこと。心苦しさの方がよほど大きい。
先ほどは麻鈴の誘導でつい本音を漏らしてしまったが、結局は麻鈴に救われたとも言える。眠気もあって頭の回転が鈍っているのだろう。
「迷惑なんだ……」
さっきのハイテンションはどこへやら。すぐに凹む絵莉華。
分かっているけど放ってはおけない。すぐにフォローを入れる。
「はいはい。どうせ私の思いこみです。ブスが余計際だつとか勝手に考えてるだけで別に根拠があるわけじゃないから……」
絵莉華の表情がぱっと明るくなった。
「ええ。麻緒はとっても魅力的」
買いかぶりと分かっていても、こんな事を言われ続けているといつか乗せられてしまいそうで恐い。そして浮きまくったイタいやつへの道をまっしぐらである。
「はいはい、話半分に聞いとく」
自戒自戒。
「本当だからね。自信持ってね」
こんな感じでテンションが乱高下するので、相手するのは結構疲れる。

```
$ cd /Tamasaka/on the way to Tosawa high school at Matoya
```

三人で遠澤(とおさわ)学園への道を歩く。
同じ道で同じ面子だが二人は違う制服。腐れ縁の相棒でも新鮮

彼女が囲まれている横で稼働監視をしていた面々から、声が上がった。
「最終プログラム、実行を終え始めました。残りの実行中ビーコンは１８０、１７３、１６８……」
「ほら、こっちでスタンバイなさい」
「そ、そんなぁ」
翔子に手を引かれては逆らうという選択肢もなく、玲香は放送設備の前に立たされた。
さすがに覚悟を決めるしかないかと原稿に目を通す。
（まぁ、この程度なら……）
お約束の台詞が数行並べられているだけで、そう拒むこともないかなと考えを改める。そんな気持ちの変化を察したかのように、状況を伝える声が飛んできた。
「間もなく完了しまーす。残り30、25、19……」
覚悟を決めたら逆に、緊張感が高まる。大したことなかったはずの台詞を言えるか、だんだんと不安になる。
そんな玲香の変化を察して、背後の翔子が彼女の両肩に手を置く。
「大丈夫よ。放送に失敗しても、プロジェクトは成功だわ」
翔子の声に緊張が解かれることのないまま、玲香には完了を告げる声が届いた。
「完了しました！　全ビーコンにてエラーなく完走、無事完了ですっ！」
「おーけい、放送のスイッチ入れるわ」
――バチッ
トグルスイッチが跳ね上げられると、スピーカーから微かなホワイトノイズが流れ出す。
マイクを持つ彼女は息を吸い、台詞を声にした。
「ただいま、全プログラムの実行を完了しました。実行は無事完了、成功です」
完了を伝える玲香の声に、フロア中が沸いた。
――おーっ
――ヒャッホゥーッ！
――ぐっじょぶおれたちーっ
――やったー
――クリスマスさいこーっ
「本日零時より実行を開始したプログラムは、途中若干のトラブルがありながらも、最終的には予定通りに完走しました。最終目的たる効果についてはまだ報告がありませんが、実行結果からは十分期待できるものと思われます」
プロジェクト始まって以来最高の歓声に包まれながら、玲香は放送を終えた。
周りを見渡すと、拍手する者、文字通り飛び跳ねて喜ぶ者、抱き合う者、背をもたせ開放感に浸る者、それぞれが大喜び。玲香自身、身体こそおとなしくしているが、心中は緊張から大喜びに移行中。
戻すのを忘れ握り続けていたマイクを、定信がひょいと抜き取る。そして、言う。
「本当にお疲れ様でした。ここからはささやかなお礼、完走記念のクリスマスパーティです。適当に飲み食いして騒いでください。そして十七時からは、みなさんに、最後の仕事をお願いします」
引き続き大騒ぎのフロアだったが、定信の最後の言葉で水を打

「きゅーぅ、お姉様ぁ、お綺麗ですぅ……」
「ありがと。……少女趣味が過ぎるとはわかってるんだけどね。こういうの、好きなの。意外でしょ？」
あっけにとられ言葉を忘れそうな玲香に微笑み話しかけながら、翔子はチョコレートブラウンのワンピースを拾い、着直す。
「ううん、全然、ぜんぜーんっ、そんなことありませんのですよぅ。とってもお似合いなのですよぉ」
玲香は、宝石でも見るかのように感嘆している。
「そ、そうかしら」
その反応に単純に恥ずかしくなり、翔子は珍しく慌てた風に、ボタンを留め直した。
数分前の姿に戻ったはずの彼女は、少し、変わった。柔らかな笑みと、わずかに紅潮した頬。そして特別な優しさを湛えた声で、玲香の手を取った。
「さぁ、あと二時間よ。行きましょう」
「はいっ、翔子お姉様っ」
再び誰もいなくなった仮眠室は、少しだけ、静謐さを欠いていた。

「早川さん、お願いします」
「何ですか、これ」
定信が手渡したのは、一枚の紙切れ。半分にも満たないスペースに文章が印字されている。
「プロジェクトのグランドフィナーレですからね、それを伝える放送原稿です」
「え？　放送原稿……？」
説明を受けても理解しきれず、ぽやんとする玲香。いったい何だろうと内容を読み出すと、後ろ、遠くから、翔子の声が聞こえる。
「こっちはおっけーよー」
「ありがとうございまーす」
目の前の定信が玲香の肩越しに答えている最中、総一が寄ってきて説明を続けた。
「プログラムの実行完了を、うちの使ってる全フロアに放送するんだよ」
「ぁー、そういうことですか。って、私がですか？」
納得したものの納得しきれない彼女に、今度は玲香が背後から続けた。
「玲香ちゃんしかいないでしょう？　プロジェクトマネージャ様、なんだからね」
「ええ、その通りです」
同調する定信もマネージャの片割れだったが、彼女にそれを指摘する余裕はないらしい。
「ぇ、でも、ぁ、あの、私、こういうの苦手で……」
一生懸命に原稿を返そうとする玲香だったが、不幸にも、吉報は待ってくれない。

みがある。悪くない。
坂だらけの珠坂でも一段と盛り上がった万戸屋台の坂上に中等部・高等部が並んでいる。珠坂大・附属の紫城高とならぶ学園台地だ。もっとも、レベルの方は結構差があるが。
絵莉華はしっかり車道側を歩き、間違っても落ちないように麻緒の左手を引いてくれている。高校生にもなってこのシチュエーションはかなり人目が気になるが、なんか誇らしくもあるのが麻緒的には実に複雑。
しかしである。
その間にも何人もの別の制服とすれ違ったが、誰も振り返らない。
十人のうち九人は振り返ってもよさそうな美人なのに（しかも隣にはパッとしないメガネ女でコントラスト抜群）。もう少し興味を惹いても良さそうなもの。
そう、この絵莉華、不思議と目立たないのだ。
正確には、気にされない、というべきなのだろうか。
中学三年間を通して、浮いた話どころか話題に上ることさえほとんどなかった。
高嶺の花すぎて近づきがたいというところはあるかもしれない。実際それぐらいのグレードだ。でも、実態はろくに意識されていないというのに近い。
無視されているというのとも違う。みな普通に会話している。ただろくすっぽ関心をもたれていないようだ。
麻緒としてはそれはそれでなんか釈然としないものがある。逆説的だが、こんな美人さんと友達なんだ、と絶叫したい気分に駆られる時もある。

人目をひかない美人。
炬絵莉華とはそういう少女であった。

```
$ cd /Tamasaka/Tosawa high school at Matoya
```

「お姉ちゃんたち、やっぱり同じクラスなんだ」
これで十年連続。
クラス編成表を見るまでもなかった。なんかもうこの状況は読めている。
いや、諦めているといった方が正確か。
「なんて漫画的。誰か狙ってやってるんじゃないかとさえ思えるね」
「じゃあ私はその誰かに感謝」
と柏手を打つ絵莉華に、嫌な神社の事を思い出させられた。
「いつぞや麻鈴の言ってたナントカ姫様だったりして、あの神社の」
「お参り行ったの？」
「ま、無事進学は純粋に実力だけどね～、実力」
胸を叩いて見せた。内心冷や汗ものだったが。既に合格が決まってしまった今となってはもう言い放題ってやつ。
「うん、さすが麻緒」
いや、勉強みてくれてたのは絵莉華なんだけどね……
「？」
にこにこ笑顔がかえってきた。
しまった、滑った。
私の軽口に対して皮肉を言ってるわけじゃない。絵莉華は本気でそう思ってる。

それが分かるだけに急に恥ずかしくなってきた。

「とにかく！　よかったということで！」

「うん、よかった」

「よかったね、お姉ちゃんたち」

自分たちの発言と雰囲気に酔い、抱き合って肩をたたき合い、ちょいと異様な盛り上がりを見せる三人だったが……ふと我にかえると、ずいぶんと多くの視線を（羨望ではなく奇異の、だったが）集めていた。

「か、解散。ほら麻鈴、遅れないように中等部行った行った」

「はーい」

さっきまでの自分たちの姿を想像してみると、ほんと赤面ものだ。

いずれ劣らぬ美少女、であれば絵になったんだろうけどね。

絵莉華と並んで見劣りしないとまでは言わないけど、雰囲気を台無しにしない、せめて違和感がないぐらいの容姿は欲しい、と思わずにはいられなかった。

```
$ useradd -a "Marin's buddy" -g BP3 -G Futami Mimimi
$ useradd -a "Mimimi's rival" -g BP3 Morigishi
$ cd /Tamasaka/Tosawa high school at Matoya/classroom 1-3
```

絵莉華謹製の弁当を取り出し、昼食にしようとしていた矢先。

「飛成さん、ちょっといいかな」

ちょっとドキッとした。

少なくとも学校においては自他共に認める地味女である私が男子に話しかけられるなんて珍しい。

案の定、声を掛けてきたのは馴染みのない顔。つまりは外部受験組ということだ。

自己紹介では確か……盛岸くんとか言ってたか。

よく通る少女じみた声質と淡い色の癖ッ毛、ちょっと日本人離れした感じの美少年。即座にカップリングを二つ三つ想像してしまった事で印象に残っていたのだ。

「どんなご用件で？」

「あんまり大きな声では言えないから、ちょっと耳を拝借」

「あ、うん」

平静を装って応えるが、瞬間的に掌に汗が滲むのを感じる。

自分でも口調が微妙におかしいのがわかる。

麻緒にとっては自己表現は紙の上でやるものであって、特に同年代の異性と自由に会話をするのは苦手だった。

手で口元を隠し、すっと顔を寄せてくる盛岸くん。

うわ、近い。近いぞこら。

心臓が見事に早鐘を打っている。

「飛成さんに一つお願いがあるんだけど」

これでもし一目惚れの告白なんかだったら厄介だ。

というわけで、先に釘を差しておくことにする。

「絵莉華を紹介しろって話なら却下。問答無用」

これまで絵莉華ファン同士が牽制しあっていたと仮定すれば……面子が入れ替わった今なら、抜け駆けは十分考えられる。

与しやすしと見て私から道をつけようと企んでもおかしくない。自分が男子ならきっとやる。

「いや、それはありえないから。安心していい」

「じゃ、まさか……」

さらに緊張三割り増し。眩暈がしてきた。

静まりかえった廊下を歩き、翔子はベッドの並ぶ仮眠室の扉をノックした。

――……

反応がないことは予想通りと流れ動作でノブをひねりドアを開け、部屋の中を覗く。誰もいないこと確認して、追いついてきた玲香に目配せした。

「よかった、誰もいないわ。入って」

二人が部屋に入ると、バタンと扉が閉じる。

室内はカーテンが開けられ、北窓特有の静謐な明るさにあった。

翔子が戻ってきた喜びも忘れるぐらいに状況が理解できていない玲香は、いったい何だろうと思った通りを口にする。

「翔子さん、あ――」

が、彼女の声は、翔子の胸に押し消された。

「今は休憩中、ね？」

翔子は、玲香を腕の中に収めた。

形のよい頭を抱いていた腕がゆっくり降りて、肩を、胸を抱いた頃、二人の視線が交差する。

「ただいま、玲香ちゃん」

精一杯いつも通りを装った声は、玲香にどう聞こえたのだろうか。わずか十センチ先にある表情の変化を不安に見守る翔子に、答えが返ってきたのはすぐのことだった。

「っ、ぉ姉様ぁ、翔子お姉様ぁ、っみゃぅ、玲香、寂しかったですぅ、っか、帰ってきてくれてよかったですぅ、お帰りなしゃいぃ、ふゃみゃぅーっ」

涙を浮かべながら十センチを詰め、おでこ同士を合わせて。

二人は上目遣いに、お互いの笑顔に笑顔で応えた。

「ごめんね、心配かけちゃって。だから、ねっ？」

翔子はそう言って優しく腕を解き、ゆっくりと二歩、下がった。玲香と正対したまま、ボタンを外した。彼女の纏うワンピースの、前中心を留める大きなボタンを。上から、一つずつ。

「はきゃうっ、ぉ、お姉様、な、何してるんれえすかぁっ？」

状況が再び理解できなくなりながらも、とりあえずとんでもないことになってると認識したらしく、玲香は驚き、口をぱくぱくさせている。

一方の翔子は穏やかそのもの。玲香があわあわとしている間にもまた一つ、ボタンを外し手を下方へと移動させる。

「約束したでしょう？」

彼女らしい不敵な笑みで、下腹部のボタンを外す。

「っ、ふぇ、ぁ――」

理解より先に緊張する玲香とは対照的に、翔子は迷わず、もう一つボタンを外した。

玲香の少し開いた口のように、翔子を包むべき服が中途半端にはだけられている。

右手を使い左肩から、左手を使い左肩から袖を抜くと、ストンと落ちる。

無造作に脱ぎ捨てられたワンピースの上方には、スノーホワイトのストッキング、淡いマンダリンオレンジで揃えられたガーターベルト、ショーツ、キャミソール、ブラジャー。逆光に照らされ、余計に蠱惑に映る絵だった。

「玲香ちゃんに、最初に見せるって約束だったから」

状況に似つかわしくない、いつも通りの明るい声が、二人だけの部屋に響いた。

うな光景である。
　玲香もまた悲痛な表情で端末に向かうが、みなとは違いキーを叩くこともなく、画面の何を追うでもなく。ただひたすらに、翔子を待っている。
　そんな彼女の頭上から、二時間ぶりに人の声がかけられた。
「おはよう、玲香ちゃん」
（ふぇっ？――）
　蒼白の頬に目の下の隈がアクセントとなった顔を急転させ仰ぎ見ると、彼女の視線の先には、待ちわびた笑顔があった。
「ぉ、おね――」
「しーっ、今はまだ、お仕事中よ」
　真っ赤にした瞳に涙をためて言葉を紡ぎ出した玲香の唇を、翔子は人差し指で制止した。
「ちょうど十時よ、総ちゃんのところに状況確認に行ってきなさい」
――こくんこくん
　封じられた唇を動かすことなく、身体で「はい」を示すと。
　玲香はにわかに色めいて、駆けだしていった。
「こら、室内を走っちゃダメでしょー」
「はーい、行ってきまぁーすっ」
　仕方ないわねと苦笑しながら、翔子は隣の席から向けられる視線に気付いている。
　視線の送り主である定信もまた、そのことに気付き、話を待っているのだ。
「連絡はいってますよね？」
「はい、そうなんですが……」
「なら、それ以上はありません。プロジェクトに対してマイナスになることはありません。その点については責任を持ちます」
　視線を合わさぬまま、数秒の会話は終了した。
　しかしこれだけはと、彼は再び口を開いた。
「……彼女には、説明してあげてください」
「そう……、そんなに心配してくれたのね」
　定信はその手の機微に疎い。そんな彼にもわかるほど、玲香は翔子を心配していた。
　その事実に対して、嬉しさよりも少しだけ、辛さが勝っていた。
（泣いたら、格好悪いじゃない……）
　翔子は無機質に点る蛍光灯を見ながら、視界の端でパタパタと走って戻ってくる玲香を捉えている。
　数秒後、目の前に戻ってきた彼女に、翔子はいつもの笑顔を向け、先に声をかけた。
「どうだった？」
「はい、順調ですっ。問題なしっ！」
　問いに答える玲香がすっかり血色のよい笑顔を取り戻していたことに安心して、彼女は今度こそ涙がこぼれそうになった。それを見られまいとしたのか、はたまた、たまたま状況が重なっただけなのか。
「そう、なら、いらっしゃい」
　くるりと背中を向け、微かにうわずった声で、玲香を誘う。
「ふぇ？」
　翔子の意図するところがまるでわからない玲香は、頭に？を浮かべながら素直についていく。今はただ、翔子といたいと、身体が動いていた。

「朝一緒にいたのって妹さんでしょ。紹介してくれない？」
　そっちか！　ロリコンめ！
「……おとといく来なさい凸(｀目´#)」
「あはは、お願いだからね～」
　麻緒の沸騰をさらりと受け流した盛岸は、ひらひらと舞う蝶のように軽やかな身のこなしで退散していった。
「人の話を聞けっ！」
「麻緒、何でカッカしてるの？」
　絵莉華はエレガントに首をかしげていた。
「……あんたには一生縁のない種類の怒りだから」
　ちくせう。

```
$ usermod -a cute,±OD Mao
[Mao@April20(Sunday) /Tamasaka/municipal culture center
building 3F/table A4]$
```

　土曜日。快晴。絵に描いたようなイベント日和。
　そして三月に一度の晴れ舞台。
　全国的に見れば中の小といった規模ではあるが、地方小都市である珠坂で行われるものとしては最大級と言える。
　これが気合いが入らないはずがない。
　そして今回は麻緒の地味～な個人サークルもひと味違う。いや、生まれ変わったと言っていいだろう。
「今回はチカリカですか」
「あ、いつも御贔屓にありがとうございます」
　このお兄さんは数少ない常連さんだ。
「ヘンプコードさんの本はちょっと毛色が違っててい意味での同人っぽさがありますからね。僕の見立てじゃそろそろブレイクかなと思ってたとこなんですよ。なんか感無量だなあ」
「そう言っていただけると光栄ですよ～」
　これこれ、こーゆうのが励みになるんだな。小さな自信が思い切りにつながって、今日の成功があるのだ。
　つうかそうとでも思わなければ恥ずかしくてやってられない。
　既に振り切ってやけくそモードともいうが。
「これとこれ二冊ずつ」
「はい、千五百円です」
「お買い上げありがとうございました」
　しかも今回はかつて無いペースで本が出ている。冊子の山がみるみる低くなっていく。
「きっとその倍は必要になりますよ」と麻鈴が言った通りに。
　進学を機に心機一転。こいつらを引っ張り込んだのは正解だった。
　お手伝いその1こと麻鈴は制服の上に黒マントととんがり帽子着用の魔法使いスタイル。
　お手伝いその2こと絵莉華の出で立ちは白のブラウスに黒のコルセットスカートに黒の編み上げブーツというもの。
　目一杯お洒落しろと言ったらこんなのが出てきたというわけで、その時は相変わらず派手なのか地味なのか評価に困る趣味だと思ったが、なんともう一組こしらえていたという。
　麻緒用に用意された衣装はサイズを抜きにすれば絵莉華自身のものとほとんど同じだが、袖に施された刺繍だけが異なっていた。麻緒のものは丸っこくデフォルメされた赤い竜、絵莉華のは真紅の雪だるまという何ともシュールなモチーフだ。

「可愛いでしょう」
と絵莉華はご機嫌だったが、
「なんか＝血だるま＝って感じする。ちょいやばそう」
しかも両手が包丁だし。
「ダメかな？」
すぐダメ出しと解釈して落ち込む。
「いや大丈夫。十分可愛い。可愛いは正義だから無問題（モウマンダイ）。」
精神分析とかに諮ってみるとそれなりの解釈がありそうだが、
（しかもろくでもない方向性で）、絵莉華自身が気に入ってるなら気にしない事にする。
「で、こっちはなんでドラゴンなわけ？　そのココロは？」
ガオーというより、くわー、とか、くけー、って感じの絵柄。
「飛成りだから赤の竜王」
将棋ネタである事に気づくまではちょっと時間が掛かった。
「なーる」
竜が冠をかぶってるのはそういう意味ね。
捻りすぎっぽい気もするが、落ち込みやすい絵莉華に対してはツッコミ禁。客寄せパンダはちょっとハイなぐらいの方がいい。
ちょっと語弊があるが、別に絵莉華を馬鹿にしてるつもりはない。名実ともにサークルの一員となったからには最大限に協力してもらってるだけでだ。
条件は真緒自身だって同じ。べたべたの女の子らしい服装のうえ、慣れない化粧までして（麻鈴の仕業だ）思いっきりめかし込んできている。実感としてはおしゃれというより限りなくコスプレだが。
「商品に対する自信だけで広告を打とうとしないようじゃただの頑固親父さんです。手にとってもらうまではリングにのぼっていないも同じ。となれば見た目のインパクトはどうしても必要です。できれば正攻法が望ましいですね」
参謀を気取った麻鈴は中学生らしからぬ事を宣い、
「それなりでも面白いものを描いている自信があるのなら、読んでさえいただければこちらのものでしょう。このぐらい許容してください」
結果、麻緒はこんなこっ恥ずかしい真似を強要されているわけであるが……反応は悪くない。
ちなみにいつものダテ眼鏡も取り上げられてしまった。世界をガラス越しに見ることで立ち位置を一歩引ける便利な他人事化スイッチで、ヘタレ少女が強気発言をするためには大変有効なアイテムなのだが……今日は無しでもわりと大丈夫。
なにせ周りは妄想を共有できる同志ばかりなのだから、誰はばかることなくはじけたところで実生活には影響しないし、楽しい現実となら真っ直ぐ向き合っても後には尾を引かない、という感じか。
「あのー、写真いいッスか？」
ごっついカメラを提げたごっついごっつい髭の兄ちゃんが話しかけてきた。
こわっ。
「お、オーケーだけど、できれば本も見て欲しいかな」
買わなきゃダメ、と言いたいところだが。メガネ無しなのでこんなところで妥協。振り切ってこの程度とは我ながら弱い。
「もちろん買うッスよ、チカリカ本」
しかしあっさり交渉成立。

者ぐらいだろう。また玲香も、さすがに口に出して溜息をついているわけではない。
「そんな心配するなよ。案外好調だしなぁ」
うろうろする彼女に声をかけた総一のように、プログラムの実行状況が心配で居ても立ってもいられないのだろうと、周りには思われていた。
（三十分、長いです、長いのですっ。あと、みゃぅーっ、六時間もあるですぅ）
彼女の時計によれば、翔子と別れて三十分と少し。
何度目かの往復でたまたま稼働監視メンバの横とを通ったところ、声をかけられた。
「第四プログラムを実行開始しました。予定から十五分遅れですが、順調です」
（ぅー、お姉様ぁ、玲香は信じています、信じていますけどきゅんきゅん心配しちゃいます……）
（やっと一時間半ですぅ、みゅぅ、あと五時間なのですよぅ）
彼女の時計によれば、翔子と別れて一時間十三分。
自分の端末のキーボードを眺めていたところ、上方から定信の声がした。
「戻りました。具合はどうですか」
（みゅーぅ、翔子お姉様ぁ、無事ですよね？　無事ですよねっ？）
（ついに二時間半、二時間半ですのっ。折り返しまでもうすぐですぅ。翔子お姉様、早く来てくれないと玲香壊れちゃうですよぉ）
彼女の時計によれば、翔子と別れて二時間半が過ぎた。
時刻は午前八時、天気よく晴れた朝、窓の外を見ていると総一が報告に来た。
「予定通り第五プログラムを実行開始、遅れは解消。まだ油断はできないが、極めて順調だ」
（翔子お姉様も今、晴れやかな空を見ていますか……？　ぁぅ、みゃぁだぁっ、そんな、ダメ、ダメですぅっ！　玲香以外の人と夜明けを迎えるなんて、ダメダメダぁメーっ！）
心中を言葉にしないのは幸いだったが、全く反応しない様子はさすがに不自然。それでも総一は良心的に解釈し、半ばひそひそ声で、事の顛末を見守っていた定信に聞いた。
「……玲香、壊れちゃいました？」
「そうですねぇ、やはり、とても心配みたいで」
定信はいつもの穏やかな表情で、あながち嘘でもない回答を返した。加えてそれとなく、総一を遠ざけた。
「平和な状況ですし、そっとしておいてあげましょう」
「そうですね……」
そう言って戻っていく総一の足取りが軽い理由はおろか、彼が戻っていくことすら、今の玲香には見えていなかった。
（十時、四時間半、あと二時間……。早くしてくれないと玲香、おかしくなっちゃうですよぅ……）
彼女の時計によれば、翔子と別れて四時間半が過ぎた。
通常の職場なら業務も始まり活気の出てくる午前十時。玲香の目の前は、実行プログラムが変わるごとに人が減り、残っている者は憔悴しきった顔を端末に向け、死線を越えたかとでも言えそ

歩き出した。
「ぁ……」
「お休みなさい」
左手を軽く振りながら去っていく後ろ姿に、定信は茶目っ気を感じることなどできず、申し訳なく思い深く頭を下げた。

五時間後、人気のないビルの裏口。
重たい鉄扉の外には、二人の人影があった。
「なんでなんでなんで、そんな格好までして行くんですか……」
「ほらほら玲香ちゃん、泣かないの。言ったでしょう？　買ってくれるって言うから買っただけ、深い意味なんかないって」
午前五時三十分。
スペシャルオーダーに応えるべく職場を出ようとした翔子は、一応こっそり出てきたつもりがやはり気付かれてしまった。
事態そのものは玲香に隠す必要もなかったのだが、問題は服装である。一日中歩き回って仮眠もこなすであろうスーツを着て女を売りに行くのはどうかと、彼女は考えた。そこで日中、定信の財布をひったくりデパートで買い物し放題してきた結果が、今の彼女。
「でもでもでもぉ、そんな、その、わざわざ捧げに行くみたいに……」
袖を引っ張りだだをこねるのは玲香にとって当然だろう。
最高潮に達している心配をよそに、やる気満々と思える格好で出ていこうとしては、火に油を注いでいるようなものだ。その上さらに、翔子は余計なことを言う。
「そんなつもりはないの。でも、そういうことになってもいいよう、下着まで気合い入れてたりして」
「ダメです絶対ダメですぅ、翔子さん元の洋服に着替えてくださいぃ」
本当に涙の出てきた玲香に、翔子はすぅっと顔を寄せ、耳元でささやいた。
「なーんて嘘よ。この下着を最初に見るのは玲香ちゃん、約束するわ」
「きゅ、はわぅ、そ、それは、それで、えと……」
一瞬で蒼白気味から紅へと変化した顔を隠すため、玲香は翔子を離し、両手で頬を押さえる。
その瞬間を待っていたかのように、翔子はポンと彼女の頭に手を置いて。
「じゃ、行ってくるわね。そっちは頼んだわよ」
「ふぇ？　ぁ、翔子さんずるいっ、待ってくださいぃ」
腕を掴むことなくだだをこねている玲香を置いて、翔子は通り沿いに待たせているタクシーへと向かう。
最後まで「翔子さん」と呼ばれたことは、彼女の歩みを確かなものにさせた。
確かな歩みは、玲香が追いかけることをとどまらせた。
玲香は執務室に戻ると、全く落ち着きなく自席と監査チームの島とを幾度か往復した。
（ふみゃぅ、ぅー、そろそろ……はぁ、まだ十分しか経ってないですぅ）
翔子にスペシャルオーダーが出たことを知るものは少なく、定信と玲香の他は、翔子の代わりに稼働監視の立ち会いをしている

「絵莉華、麻鈴、ご指名〜」
「お嬢さんも一緒にお願いします」
「わたし？」
来たキタ艹――ノ(ﾟ∀ﾟ)ノ(ﾟ∀ﾟ)ノ(ﾟ∀ﾟ)ノ(ﾟ∀ﾟ)ノ(ﾟ∀ﾟ)ノ――ﾐﾐ
「ぜひ三人で」
よっしゃ。
なるほど。つまりこのぐらい気合い入れれば、ウルトラ美少女と並んでも足引っ張らない程度にはなってるのか。
うんうん。
絵莉華や麻鈴には及ばずとも、麻緒とて着飾ればそう見れないこともないのだ。多少しょっぱかろうが今日はハレの日、ノリがわかる面々には許してもらえるってのもあるのかもしれない。

$ cd /Tamasaka/Hinari's house/Mao's room

「わ、笑いがとまんね〜」
「おめでと、麻緒」
「おめでとうございます、おねえちゃん」
コーラで乾杯中。
自らコスって売れ行きに貢献。そして完売。なんという達成感。
シンプル単色表紙の一般向け本を中身も確認せずに買ってく客が多かったのは気になるが、今日のところは種まきだから許容範囲。いきなり人が集まっただけでも想像以上の成果と言える。次を楽しみにしておこう。
「ほら、もう感想上がってますよ」
「へー」
麻鈴の示したPCのディスプレイ上には『まりんすのー』と名付けられたブログサイトが表示されていた。なんと記事一つ写真一枚に今日付でのコメントが三十以上！
「おー」
まりん「お姉ちゃん（ヘンプコード）のお手伝いしてきました。向かって右が私、真ん中がお姉ちゃん、左がエリカさん」
「まりんたんお疲れさまです」
「ヘンプコードさんも美少女。ハァハァ」
「→ドジンシも買っとくが吉。ヘンプさんのちかぼーカワイス」
「珠坂まで遠征して生ヘンプさんと握手したよん」
「自画像で眼鏡ッ娘だと思ってたのにorz」
ってな具合で異常に盛り上がっている。
それでも不思議と絵莉華に対するコメントがほとんどないのね。
「みんな今日が初めてのにわかファン？」
とは思えないカキコも結構あるんだよね。
「いいえ、前もって宣伝に努めてましたから。結構期待されてたんですよ」
「全部麻鈴が？」
過去の本のサンプルをアップロードしてあったり、裏設定を含めたかなり詳しい解説を加えてあったり、ものすごくマメな造りになっている。
何でも出来るよな、この妹様は。
「はい。完全スキャンを勿体ぶったパスつきZIPで固めて流出させたり、某大手掲示板で複数IPを駆使して自作自演したり、各所の鯖に世論誘導用人工知能ウィルスを忍ばせてみたり、やれるだけのことはやりました」

どこまでが本気でどこからが冗談なのか分からないが、少なくともにっこり笑って言うような内容じゃないのは確かだ。

これだから学校で魔法使い呼ばわりされるんだな。今日のコスもその辺がネタなんだろうけど。

「……手が後ろに回らない程度にしときなさいよ」

「現代の警察機構に尻尾をつかまれることはまずありませんから」

今度は口元が笑ってない。

前言撤回。これ、マジに魔女です。

```
$ usermod -a verycute,"a popular coterie-writer" Mao
[Mao@April21(Monday)  /Tamasaka/Tosawa high school at
Matoya/classroom 1-3]$
```

「最新刊売ってください」

開口一番、予想外のところで予想外の台詞。

「な!?」

こちとら基本的に陰性ヲタ。ココロの準備ができていない状況では辛い。

「スタジオヒナのヘンプコードって飛成さんでしょう?」

しかも相手は文武両道かつイケメンの完璧超人、伴君。やりにくいことこの上なし。

「……えと、最新刊は完売」

学生モードのまま、しどろもどろで何とか答えた。

同人活動のこと、学校では話してないんだけどな〜。

……麻鈴か!

糸目で笑う魔女っ娘の表情が思い浮かぶようだった。

「増刷するんでしょ? でもまあ、とりあえず在庫一通りほしいんだ」

「……まいどあり。来週にでも持ってくる。伴君だっけ」

「藍四郎って呼んでくれていいよ。麻緒さん」

うわ、呼び捨てされた。

痛っ、視線痛っ。主に女子の視線痛っ!

「考えとく」

雰囲気に耐えかね、話を早々に切り上げて伴君を追っ払った。

が、しかし。

あの〜、余計に視線が痛いんですが……

```
$ su spectator
[spectator@April21  /Tamasaka/Tosawa high school at
Matoya/classroom 1-3]$
```

「ちょっとぐらい可愛いからって調子に乗ってるよね」

「あの伴君から話しかけてもらえたのにあんなに邪険にするなんてね」

「中等部の頃もずっとおとなしいフリしてたけど。盛岸君に聞いたけどその筋じゃずっと前から有名らしいよ」

隅の方の席に集まった女子たちの間で、妙な雰囲気が醸造されつつあった。

「やる?」

「やろう」

「うん」

```
$ su Mao
```


頬を撫でた。

無言の会話に玲香が仕事を忘れそうになったそのとき、後ろから声がした。

「いやいや、そう気にすることもありませんよ」

彼女はびくっと慌てて振り向くと、定信がひょこひょこと近づいてくる。

「あ、驚かせてしまいましたか。てっきり、気付いているものかと」

「いえ、大丈夫です」

実際に多少驚いたものの、執務室に彼が入ってくることはごくごく当然のこと。コンビニのレジ袋を下げているので、夜食でも買ってきたのだろうと玲香は単純に察した。

しかし翔子は、そう単純に納得していないらしい。笑顔こそ崩さないもの、含みのある口調で、しれっと定信に言い返した。

「いいえ、全然大丈夫じゃないわ。勅使河原さん、そういう男性は嫌われますよ?」

定信は、翔子には何か言われるだろうと予想していたのかも知れない。おどけて見せつつ、台本でもあるかのように受け答えをしている。

「いやぁ大門さんにはかないませんねぇ。ま、これも僕の仕事ですよ」

「無粋なお仕事で」

「手厳しい。しかしあと半日は、ご勘弁を」

「はぁ、戦地に赴く私に、一夜の記憶を残すことすら許してくださらないのですか」

「そりゃ言い過ぎですよ。早川さんが心配するでしょう?」

流れるような会話に、玲香はいったい何のことだろうとぽやっとしていたのだが、自分の名前が出てきて、小さく小首を傾げ反応している。しかし、全く何のことかわかっていないらしい。

二人はそれも織り込み済みだった様子で、翔子が定信からレジ袋を受け取ると、玲香の右手に自らの両手を使い握らせた。

「総ちゃんたちに持って行ってあげて」

「はいっ、わかりましたっ」

翔子に頼まれた玲香は元気な返事とともに、パタパタとフロアを駆けていった。

楽しげに彼女の姿を見送りながら、翔子は後ろにいる定信に言葉を投げた。

「ご用件は?」

彼の方は大まじめに翔子の後ろ姿と向き合い、言葉を返した。

「さすがに仮眠を取っていただきたいと思いまして」

「それもそうですね。五時に起きれば間に合います?」

たおやかに振り向き視線を合わせても、定信は真摯としか言いようのない態度を維持している。

「はい、十分です。目覚ましは不要です、僕の方から起こしに行きますから」

「……うちのマネージャたちは経験値不足もいいとこね」

「え? 済みません、僕、何か変なこと言いました?」

「女性の寝室に男性が入るなんて、感心しませんね」

翔子へのイレギュラーかつ危険とも言える依頼に、彼は深い責任を感じていた。故の配慮のつもりが裏目に出てしまったらしい。

空気を読むこと。シビアな判断を迫られる彼らには、欠けていた方がいいことなのかも知れない。翔子はそんなことを思いながらも、多少は反省してもらおうと、彼の反応を待たず仮眠室へと

「えーっと、多分、だけど、ビーコンから仕様外の値が戻ってきているっぽい。ここのところ、空っぽなのおかしい」
花羽が後ろに控えていた総一に指さして示すと、なるほど確かにと言う表情で総一が隣に指示を出す。
「三田村、この辺のログを吐くあたりで、入力値チェックしていないコードってあるだろ」
「えーっと、んー、見つければうちらで書き換えているつもりなんですが……」
総一からの指示を先読みしていたかのように迷いなく端末を操作し、数秒の後に該当箇所が表示された。
「ぁーありますね。今日コミットされた中に、少なくとも二つ」
「チェックルーチン、すぐに書けるか」
「ぁー、それならあたしが書くわ。この辺の仕様、頭入ってる」
「よし、花羽が書いてコミットしてくれ。俺がパッチ作って当てるから」
「わかった」
すでにコードを書きながら返事した花羽を見て、周りで待機していた面々も動き出した。
「他のチームもすぐ再確認してくれ」
総一の依頼はすでに念のためのものとなっており、中にはもう一歩二歩離れた先から返事を返すものもあった。
「わかりました」
「了解」
「おーけー」
稼働監視を続ける島から十人弱が立ち去り、残った面々も余裕なく端末との格闘を始めている。しかし原因がわかればこっちのものとばかりに、暗い雰囲気は全くなく、逆に場は活気づいた。
そんな状況を目の当たりにして、玲香は所在なげだ。
（……私がいても、何もできないし、邪魔なだけですよね）
彼女は状況の監視をしているわけでもなければ、プログラムの修正をできるわけでもない。常時異常時問わず、現場では概ねお飾り的存在だ。そのお飾りでいることが重要だとはわかっていても、この状況下ではいかんせんいたたまらない。
「玲香ちゃん、いらっしゃい」
そんな彼女を見かねてなのか、隣に立ち状況を見守っていた翔子が彼女に耳打ちした。そして先導するように、少し離れた彼女の自席の方へと歩いていった。
玲香の席の後ろのブラインドを上げると、窓際らしいひんやりした空気。その向こうには、ビルの窓から漏れる明かりやひっきりなしに通る車のライトで照らされる、東京らしい夜景が広がっていた。
「いにくかったんでしょ？　あそこ」
玲香は自分の机に右手をつき、視線を夜景の手前にある翔子に移しながら答えた。
「あ、はい、ちょっと……」
「私もなのよ。この期に及んでハードやファームの修正はできないから。さっきのは私たちのミスが原因だから、余計に、ね」
翔子の表情は話と重ならず、カラッと明るい笑顔だった。口調も軽やかなのは、玲香を気遣うために思われた。
二人の視線がゆっくりと交わされたのを合図に、一歩二歩と翔子は玲香に歩み寄る。
左手のプラチナリングが夜の街を背景に軌跡を描き、柔らかな

[Mao@April22(Tuesday) /Tamasaka/Tosawa high school at Matoya/courtyard]$
麻鈴と分かれて高等部の中庭を通り昇降口へと向かう途中。
「麻緒」
小さな声、ちょっと遅れてどすんと背中に衝撃。
「？　……ぐげ⁉」
ばふっ。
突き飛ばされて二三歩たたらを踏む。なんとかのこった。
「こら絵莉華っ！」
抗議の声を上げて振り返ると、絵莉華が半分白くなっていた。しかも頭の上に黒板消しを乗っけて。
「楽しい？」
「ううん」
絵莉華が首を振ると黒板消しが転げ落ちるとともに、長い黒髪とチョークの粉が舞った。
「けほ、けほ」
何をやってるのやら。
と思いきや、
「麻緒っ！」
今度は真っ正面から飛びついてきた。
「またかっ！」
体格と運動神経に差がありすぎる相手だ。一瞬の抵抗も許されず押し倒されるほかない。
ばちゃん。
ばちゃばちゃん。
頬に水滴がかかった。
っていうか、なんで水？
「大丈夫？」
目を開くと、絵莉華の馬鹿整った顔がすぐそこに。
「あ……」
水滴は、絵莉華の髪からしたたっていた。
文字通り水もしたたるいい女。
ドキドキ。
あーもう、チョークの粉と水かぶっててもヤバいぐらいキレイだよ、ちくせう。
「「キャーッ！」」
遅ればせながら周囲から複数の悲鳴が上がる。
なるほど。古典的だが水風船爆弾か。
「「キャーッ♥」」
しかし悲鳴の質がおかしい。つうか黄色い。
おまいら百合ネタかぶれすぎ。
「炬さんステキ。飛成さんのナイトみたい」
「今まで気づかなかったけど、キレイでカッコイイよね、あの人」
珍しく絵莉華が人目をひいてる。
まあ、わかるけど。何しろ今の絵莉華には凄みがある。十キロ先からでもわかるような青白い炎のようなオーラに包まれている。
先ほどからぴくりとも動こうとしないが、座りまくった目がロほどに語っていた。
だから、麻緒は頷いた。

$ su Elica

```
$ useradd -c "Elica's sheath" -g BP3 -G kagari Saya
$ usermod -a bareblade Elica -d /the roof
$ su Mao
[Mao@April22(Tuesday) /Tamasaka/Tosawa high school at
Matoya/courtyard]$
```

紗也（さや）は麻緒より先に立ち上がると、そっと手を差し伸べてきた。

「ありがと……うわ」

麻緒を抱きよせた紗也の表情は慈母のようだったが、腕には力がこもっていた。

先ほどは黒板消しや水風船だったが、それがたとえ銃弾であっても。あらゆる攻撃から麻緒を守りきろうという意志が感じられた。

「あれ？　絵莉華は？」

「姉さんなら先に上に」

```
$ cd the roof
[spectator@April22(Tuesday) /Tamasaka/Tosawa high school
at Matoya/the roof]$
```

屋上から中庭の小径をそっとのぞき込む三人の女生徒。仮にA子とB美とC代、としておこう。

「あーあ、炬妹（かがりいもうと）に当たっちゃった」

「警告にはなったでしょ。警戒させちゃったからこれ以上は無理よ。まずはここを離れないと」

心残りを隠そうとしないA子に対し、冷静な状況判断で撤退を促すB美。すでに浮き足立っているC代。

「……ね、早く逃げよう」

三人はドアに向かって駆けだそうとしたが、すぐに足を止めた。

ドアの前にはもう一人の人影。

「炬！」

「姉の方……」

腕組みして仁王立ちしていたのは豪奢きわまりないド金髪を靡かせた長身の女生徒。

双子の姉妹といっても、髪の色が全く違うので区別はいとも容易い。

「いや、残念だったわね。天が知る地が知る私が知るってね。で、覚悟はいいかな？」

あくまでも軽ーい調子と脳天気な笑顔ながら、日本人離れした金髪美人が指を鳴らしながら近づいてくるというのは相当怖い。それが黒板消しと水風船を食らわせた相手の姉であればなおさらだ。

こちらは三人、相手は一人。でも抵抗は無駄。一瞬にしてそれが三人の共通認識となっていた。

まさに蛇に睨まれた蛙、といったところ。

A子とC代は抱き合ってコンクリートに座り込んでしまい、B美も足下がおぼつかず柵につかまらざるをえなかった。

「いくら黒板消しでも屋上から落としたら洒落にならないわよ。人並み外れて頑丈な紗也だからあれで済んだけどね」

A子の前にしゃがみ込んでほっぺたをつつく絵莉華。

「それでは、申し開きのお時間です。A子さん、どうぞ」

「……さ、紗也さんに当てようとしたんじゃないのよ……ただ、飛成が最近一段と調子に乗ってるから」

「そりゃ、調子に乗るのが麻緒の天命、麻緒を守るのが紗也の天

「なぁに？」

「……がんばってくださいっ！」

「ええ、お姉ちゃん、がんばるわ」

わずか数分の逢瀬に幕を引くと、二人は穏やかな会議室をあとにした。

――23時59分57秒、58秒、59秒、

「それでは、開始します」

定信の合図とともに、モニタの監視画面が動き出した。

ビーコンの稼働状況を示すアイコンは、一斉に赤から緑へ、停止から稼働へと切り替わる。

室内があり得ないほどに静まりかえる。

そしてとんでもない緊張感の数秒を経て、待ちに待った声が発せられた。

「エラーなしです、全ビーコン正常に稼働開始しました」

――おーっ

――パチパチパチパチ……

――メリークリスマぁス！

――ひゃっほーっ

――よしきたー、頼むぞぉ

真夜中とは思えぬ大騒ぎとともに、十二時間に及ぶ長い長いプログラム実行が開始された。

監査チームの島では、稼働状況を監視するため五名のメンバが端末に食いついている。もちろんエラー発生時には警告灯が回るようにもなっていたが、それだけに頼れるほど安穏とした状況ではない。

――エラーが発生しました

録音された女性の声とともに、歓声から数分と経たぬうちに、早速警告灯が回り始めた。

「えーっと、4、5、6、10、11、収まりました。11のビーコンでプログラムエラーが出ています。ハードは正常、プログラムエラーです」

監視担当が報告すると、向かいに座っていた総一がエラーが発生しているビーコンからのログを追っている。

「おいおい、いきなりエラーとはやってくれるな」

「あー、心当たりがないだけに辛いかも」

総一の横でディスプレイを覗き込むのは花羽。

零時から二時までの、最初に稼働するプログラムは彼女のチームが担当している。

「んー、こりゃ渋いな。明示的にエラーが出てないとは。わかるか？」

コンソールを淀みなく操作しログを浚うも、そう簡単には原因が特定できない。

「ちょっと貸して」

総一が席を花羽に譲ると、十分に速かった彼の一・五倍は出ていようというスピードでキーを叩き出した。

「……確かに、わからない。ちょっと待って……」

花羽も若干苦い顔をしながら、キーを叩き続け、画面は絶え間なく流れ続けた。

周囲も固唾を呑み状況を見守る中、数十秒後、花羽の表情が軟化した。

明かりが点けられるとパトロンはもれなく前に出てきて定信や玲香を激励し、会議室を出て行く。数分の後にはいつもの見知った顔だけが、室内に残った。

翔子は総一と並んで、まだ一番端っこに座っている。

玲香が彼女に駆け寄ろうとすると、制止するかのように定信の声が上がった。

「状況はまぁ、よくはないのでしょう。しかし幸い、プログラムの実行は可能です。それではみなさん、あと一時間弱は戦士の休息。二十三時三十分、各員配置についてください。リーダは全員、監査チームの島に集合です。よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

彼の言葉に答えると、部屋に残っていたメンバは退散していった。

そして彼が「大門さんのところへどうぞ」と目配せをしたように、玲香には感じられた。故に頭をちょこんと下げ、部屋の隅へと歩み寄った。

「残念だったわぁ。玲香ちゃんの説明はなかったのね」

実に明るい雰囲気で、翔子は話しかけてきた。

おかげで玲香も、緊張や暗さを少し横に置いて、話すことができた。

「ぇ、ああ、私はお飾りですから」

隣にいた総一も、実にカラッと晴れやかだ。大勝負を前に緊張しても仕方ないと思っているのだろうかと、玲香は羨ましく思った。

「玲香じゃ人前で何言い出すかわからないからな」

「そ、そんなことありませんっ。私だって説明くらいできます」

「ま、いいけどな。じゃあ、一時間後」

幼馴染みを軽くあしらった彼は、目の前に置いていた缶ジュースを拾い上げ、部屋を出て行った。

ふと振り返ると定信の姿もなく、パタンとドアを閉じる音がした。会議室は、玲香と翔子、二人だけの空間。

普段なら玲香が大喜びするところだが、やはり、今日は勝手が違う。どうしたらいいのかわからず突っ立っている玲香に、翔子はいつもの不敵な笑顔。

「隣、座る？」

総一がいなくなった席を彼女はポンポンと右手で叩き、玲香を呼び寄せた。

その通りに玲香は座り、肩を、翔子に預けた。

「甘えんぼさんね」

「……だってぇ、ふみゃぅ」

さっきまでの明るさは消えて、玲香の顔は今にも泣き出しそうな表情だ。

自分のことを純粋に心配している玲香を、翔子は本当に理想の妹だと思った。そして肩を抱いて、耳元で優しくハッキリ言い聞かせる。

「シャキッとなさい。また明日、笑顔で会いましょう」

「……みゅぅ」

「お返事は？」

その語調は、反論を許さない、信頼を伴って。

「……はい、ぃ」

「うん、よろしい。じゃあ私は、仕事残ってるから」

「……ぇと、あの、お姉様ぁ」

命だもんね」

絵莉華はにっこりと微笑み、

「で、私の天命はね、麻緒の敵を排除することなんだ」

と、こわすぎる発言。。

「……確かにやり過ぎだったと思うわ。ごめんなさい」

申し開きは無駄だと悟ったか、B美が素直に頭を下げた。

「ほら、A子、C代も」

「ご、ごめんなさい」

「最初はここまでやるつもりは無かったの。本当よ。飛成さんが伴君を邪険にするから、ちょっと嫌がらせでも、って話だったの」

「つまりC代さんは悪くない。流されただけとおっしゃる？」

嫌みにしか聞こえない。C代は目を伏せる。

「……そうは言わないけど……」

「どうしてこんな事になったのか略、どうかあなた以下略、って？」

さらに茶化すような発言を続ける絵莉華。

「そうよ。言われてみればあなたの言うとおり。何となく決まって、何となく実行してしまったとしか言えない」

B代が比較的冷静に答えた。

「それをお望みなら言い訳させてもらうわ。私一人なら絶対にやらなかったと思う。雰囲気でやっちゃった、というだけで、自由意志があったかは疑問だわ」

「ついカッとなってやった。今は後悔している、と？」

口に出して、身振りで、消極的に。三人は三様に肯定の意志を示した。

それを確認した絵莉華は満足げに頷いた。

「おっけーおっけー。しっかり教訓を得たなら今日のところは釈放。でも二度目は無いから」

そう言い残して絵莉華が階下に消えると、三人は一斉にため息をつき、

「言われなくても二度と関わりたくない」

「同じく」

「うん」

命があった事に心から感謝した。

```
$ su Elica
$ usermod -L Saya
$ usermod -a "in the sheath" Elica
$ su Mao
[Mao@April22(Tuesday) /Tamasaka/Tosawa high school at
Matoya/courtyard]$
```

「ごめんなさーい」

二階の窓から顔を出した女生徒が拝むように両手を合わせた。

黒板消しを落としたのは彼女らしい。

「以後気をつけるよーに！」

チョークの粉をかぶった絵莉華の懐に庇われつつ偉そうに宣言した。

「はーい」

加害者の方が苦笑している。

「絵莉華もちょっと大袈裟。別に狙撃されたとかじゃないんだから」

大統領のSPかい。

「水風船とか植木鉢とかヘリコプターとか落ちてきたら……」

「んなもの落ちてこないっての。それより頭なんとかしなって」

背伸びして、本来なら艶やかな黒髪にまとわりついた粉を可及的にはたき落とす。

「こりゃいっぺん濡らさないと取り切れないないかも。そうやって私の代わりに薄汚れるようなマネばっかりしてるから、美人なのに万年地味女なんだよ」

```
$ usermod -a "target for crime" Mao
[Mao@May8(Thursday) /Tamasaka/on the way to Tosawa high school at Matoya/on a crosswalk]$
```

三人並んでのいつもの通学風景。

迫り来る重々しいディーゼルエンジン音。

ここ、でかいトラック多いからなあ。

それにしても今日はまた一段と、

「うるさいなあ、もう」

頭を巡らすと……

```
$ su Marin
$ usermod Marin -d /on the sidewalk
$ su Mao
```

目の前にタンクローリーwithドクロマーク。

「りかぼーを蔑ろにする不敬モノ！　天誅！」

窓から身を乗り出したドライバーがなんか叫んでるようだったが、意味までは理解できなかった。

訓練されていない人間はこういうとき目を閉じるらしい。それがただでさえ低い生存率をさらに致命的に低下させる愚行であるとしても。

「えっ……」

……絵莉華っ！

```
$ su Elica
$ usermod -U Saya
$ usermod -a bareblade -w "a twig" Elica
$ su spectator
```

金髪娘は一本の小枝を手に、悠々と麻緒の前に進み出た。

紗也は立ちすくんだ麻緒を背後から抱きしめ、警笛の音さえ麻緒の耳に届かせぬようにといわんばかりにしっかりと包み込んだ。

```
$ usermod -w sword Elica
```

抜き打ちに振り抜かれた両刃の長剣。コンクリートの大地を割って疾走する黄金色の閃光。

今にも絵莉華に激突せんとしていたタンクローリーは三人を挟んで二枚下ろしに裂かれてそのまま数十メートル走行し、そこで倒れ、ついで炎に包まれ、そして爆発した。

爆風と爆炎は紗也の身によって遮られ、わずかといえども麻緒に届くことはなかった。

周辺一帯が更地同然となった事は言うまでもない。

```
$ su Elica
$ usermod -L Saya
$ usermod -a "in the sheath" -w bareknuckle Elica
$ su Mao
[Mao@May8(Thursday) /Tamasaka/on the way to Tosawa high
```


定信の開口一番に、会場はどよめいた。

「ありがとうございます。それでは改めまして、プロジェクト概要をご説明差し上げます」

実にうまい説明である。内情を知っていた玲香ら、プロジェクトのメンバにしてみれば、嘘はついていないが、限りなく嘘っぽいと言える演出。そう思う彼女たちですら何とかなりそうに思えてしまう。

彼自身も予想通りの反応に満足したのか、自信に溢れた様子を維持して説明を続けた。

「まず、ご存じかとは思いますが、仕組みについてです。コンピュータプログラムにより人間の感情に影響を与えられる開発キット『インフルエンザ』を用い、今から一年十ヶ月前のバレンタインデーに失われた、正しい世界を奪還します」

スライドが切り替わり白背景の画面になると、若干部屋が明るくなった。

「ご覧の東京二十三区の地図には、約二百個の赤い点が打たれています。ここに『配信ビーコン』を設置しています。設置場所はコインロッカーや、郵便ポストの中です。このビーコンに制御プログラムを配信し、半径三十メートル以内にいる人々の感情に影響を与えることになります」

玲香は対角線上の一番遠い席、翔子の姿かを確認する。

まだ暗くてよく見えないが、隣にいる誰かとやりとりしているようだ。

何を期待したわけでもなければ、何か理由があるわけでもないが、彼女は翔子がいることに安堵を覚えた。

「制御プログラムは全六種類用意しており、零時から二時間ずつ、順次実行されます。順次実行することで影響を最大にできるよう設計されていますが、最悪途中でエラーが発生しても後続だけで実行可能であり、割り引きながら後続による効果が得られます。エラーが発生した場合も繰り上げは行いませんので、予定完走時刻は明日の正午、十二時、早くなることはありません。またトラブルがあっても、若干遅れる程度と見込んでいます」

最前列にはプロジェクトメンバ以外、俗に言うパトロンが勢揃いしている。

玲香は決して見たいと思わなかったが、無意識のうちにも探してしまうのは今朝、定信を呼び出した神谷氏。右端から順を追って確認したが、どうやら、来ていないらしい。

「成功した場合、都内限定ながら、十時頃から順次目に見える効果が現れるはずです。念のためこれはジョークとして受け取って欲しいのですが、苦い思い出をお持ちの方は、携帯電話を肌身離さずお持ちいただければと」

――楽しみにしてるぞー

――おいおいジョークじゃ困るなぁ

説明の間に、いくつかのヤジが飛んできた。

玲香はこういう場面が苦手故に、心配で視線を横に移したが、定信はヤジを期待していたように満足げだった。

「結果観測は別プロジェクトが担当し、いわゆる交通量調査と同じく、定点での実測を行います」

その後も、硬めのジョークをいくつか挟みながら、予定通りに説明会は進められた。当然のことながら、概要など、みな頭に入っている。故に質疑応答で手が上がることもなく、実にあっさりと説明会は終了。

（お姉様はもう、知っているのでしょうか……）
その心中は表情にも出てしまい、目の前のメンバたちとは対照的な影に、翔子が声をかけた。
「ただいま。玲香ちゃんってば、なぁんて顔してんのよー」
「ぉ、お帰りなさい。あの、ぇと……」
「聞いたわ」
戸惑う玲香に対し、カラッとした笑顔の翔子。
話を聞いたあとの翔子がどんな反応をするだろうかなどと、そんな先のことは考えてもいなかった玲香にとって、どんな反応であろうとぼーっと応えるほかなかった。
「心配してくれてありがとう。でも、大丈夫。とっとと終わらせて戻ってくるから」
「……やっぱり、行くんですね」
涙をたたえた瞳は、ブラインドを開けっ放しにしていた背面の窓越し、街明かりと一緒にキラキラ煌めいていた。
「お願いを断るような私なんて、玲香ちゃんも嫌いでしょ？」
「そういう言い方、ずるいです」
「そうね。私も同じことを彼に言ったわ」
玲香の瞳を見ても翔子の態度に揺らぎはなかった。だから翔子お姉様なんだと、玲香自身も気付いていた。
玲香の頭にポンと乗せられた掌は、大きく、温かかった。

その後、玲香と翔子は顔を合わせなかった。
玲香はやることがなかろうと、そうそう自席を離れることができない。別の執務室に席がある翔子が、何らか用事があって寄ってこなかったのか、それともあえて離れていたのか、彼女にはわからなかった。
そして、二十時。
一大プロジェクトのクライマックスに向け、会議室に人が集まった。いつもの円を作るようなテーブル配置は崩され、前方にあるスクリーンに全員が向くよう、セミナー室のように変更されていた。人の数もいつもより多い、見慣れぬ人も多数いた。次々と入ってくる人の中に、玲香は待っていた顔を見つけた。
（ぁ、翔子お姉様……）
玲香から、一番遠い席に翔子は座った。けれどもそれは近づきたくないからではないのだろう。彼女はスクリーンの横に立っている玲香に向かって、小さく手を振った。
（きゅうん、お姉様ぁ。玲香、がんばりますぅ）
翔子に応えて、小さく手を振る玲香。
そのやりとりを玲香の横で見ながら、人はちょっとしたことで気持ちが浮き沈みするんだなと、改めて感心している。そして手を振り合うのが終わったタイミングを見て、彼は口火を切った。
「それではただいまより、プロジェクト〝ポーリーナイト〟、最終説明会を開始します」
明かりが消されると、スクリーンにプレゼンテーションスライドが投影された。
「まず、明日の、クリスマスイヴの零時に向けて、すでに準備が整っていることをお伝えいたします。随時報告差し上げておりますよう、万全とはいきませんでした。しかし、実行結果を期待できるレベルには達しております」
――おおーっ
――パチパチパチ……

school at Matoya/on a Sidewalk]$
横断歩道を渡り終わったとたんに背後でおこったものすごい爆音と爆風。
振り向いて視界に飛び込んできたのは、ただただ呆然とするほかない光景だった。
「う、わー」
タンクローリーがガソリンスタンドに突っ込んだってとこか。
向かいの車線では何台もの乗用車が横転大破、街路樹も交通標識もなぎ倒されている。
飛び交う悲鳴と怒号、うめき声。割れたガラス、倒れた人間。
まさに阿鼻叫喚の地獄絵図。
さっきまであの辺を歩いてたと思うとガクブルもの。
間一髪。生きててよかったと胸をなで下ろしていると、
「麻緒～」
絵莉華に抱きしめられてぐりぐり頭をなで回された。
「なんか当たってない？　やけどしてない？　コブとかできてない？」
親子かっての。と、いつもなら恥ずかしがって逃げるところだが、さすがにこの状況では安心する。
包容感あるなあ。ちくせう。
って、絵莉華は私より後ろ歩いてたじゃん。
なおも私のボディーチェックを続ける絵莉華を引っぱがして後ろ向かせる。
「……あんたこそ背中が煤けてるぞ」
「さすがに熱かったしね」
煤けてる、で収まってるのにあきれる。
制服の生地はほつれや焼け焦げでぼろぼろなのに緑の黒髪はあくまで瑞々しい。丈夫とかなんとかいうレベルじゃないだろ。どうゆうキューティクルしてるんだろうねこの娘は。
っていうか、絵莉華が後ろに立ってたからこそ、麻緒は無傷なのかもしれない。
それにしても相変わらず小さな怪我が多い。
昔からよく麻緒をかばっては怪我をしていたが、こういう突然の事故でも結果として絵莉華が盾になってしまうというパターンが多い気がする。逆に麻緒は怪我らしい怪我したことない。そのへん、星の巡り合わせというやつだろうか。
「そういえば何か忘れてる気が……」
「麻鈴さんは？」
「それだ！」
ちびっこいから吹き飛ばされたりしてないだろうな。
あたりを一通り探すと、ずいぶん先の歩道で立ち話し中の三人の中に、見覚えのあるちびっ子ツインテールが見えた。
一人はふわふわのロングヘアで麻鈴に負けず劣らずちっこい。あのシルエットは〝みみみ〟こと二見美々（ふたみみみ）だろう。麻鈴の同級生で、親友というか、かなり一方的に麻鈴を追い回しているというか。まあそういう関係。
つまり麻鈴はみみみと合流するため先行してたというわけで。相変わらずのラッキーガールっぷりだ。
もう一人は意外な人物。うちのクラスの盛岸くんじゃないか。
紹介いらないじゃん。
「いっぺん帰って着替える？」
「大丈夫。こういう事多いし、ロッカーに着替えを一通り置いて

あるから」
「……盗まれるかも」
　って、そうでもないか。絵莉華は派手なのに目立たないしね。

$ su Marin
[Marin@May8(Thursday) /Tamasaka/on the way to Tosawa high school at Matoya/on the sidewalk]$

「まったく、やりすぎです」
「いやあ、何のことかな」
　すっとぼける盛岸先輩に、無言で事故現場を指さして見せる。ちょうどパトカーや消防車が集まってきたところで、野次馬も増えつつある。
「お姉ちゃんは別に危険なことを望んでるわけではないんですから」
「僕が突っ込ませたわけじゃない。それにこの程度じゃ彼女には傷一つ無いと思うよ」
　可愛らしさと胡散臭さが同居した、妖精じみた容姿の男子高校生は言う。
「期待しなかったとは言わせません。それに、無事だったのは絵莉華さんが守ってたからでしょうに」
「あの位置関係ならせいぜい軽いやけど程度だろう？」
「本当にそう思ってらっしゃるんですか？」
　ジト目で睨むと、盛岸先輩の鉄面皮がちょっとだけ怯んだ。
「とにかく、無闇と派手な展開を期待とか想像とか予想とか予知とかしないでください。私もしませんから」
「え〜」
　別の方向から不満そうな声。
「麻緒ちゃんの望みは叶えてあげたいんだけどな〜。それがうちらの天命なんだし〜」
「みみみもダメ」
　むしろ、引っかき回したいだけだろうと。
「貴方たちは影響力ありすぎます。お姉ちゃんの運命を決めるのはお姉ちゃんの意志だけで十分なんです」
　絵莉華は本当の意味で麻緒の味方だが、この二人は面白ければいい派だというのが麻鈴の認識だ。でも決して憎めない可愛らしい連中なのだ。
「わかったよ。自由意志は他の何にも代え難い大切なものだしね」
「は〜ぃ」
　素直すぎるのが余計に気味悪い。
　こいつら絶対何かやらかすだろうな、と覚悟する麻鈴であった。

$ su Mao
$ usermod -a "a wall class popular coterie-writer" Mao
[Mao@May11(Sunday) /Tamasaka/Doughnuts shop]$

　ドーナツ屋でのバイト二日目。
　なんでバイトしてるかというと、最近の売り上げを一気にＣＧ用ＰＣにつぎ込んだら、新作用予算の足出ちゃったのだ。
　隣にはいつもの美人さん。
　なんでお嬢のくせにバイトなんかしてるのかというと、麻緒につきあって、というか無理矢理くっついてきたのだ。
　なんでお嬢のくせに客商売のセンスあるんだろうね。この間の即売会でもやたら手際よかったし。

　さすがに今の一言二言で、玲香の心中を察することはできなかったであろうことが、玲香にとっては幸いだった。そして戻ってきたら自分で言うべきか、定信に言ってもらうべきか、悩みは深まるばかりだった。
　物理的に頭を抱えそうな状況に、一段落したらしい定信がチョコレートを差し出してくる。
「よければ、どうぞ」
「ぁ、ありがとうございます……」
　玲香がチョコレートの箱が受け渡ると、彼は立ち上がった。午前中同様に、机の横に立てかけてあったブリーフケースを取り上げ、筆記用具を収めて口を閉める。
「例の件で、ちょいと物資調達に行ってきます。済みませんが、一、二時間空けます、よろしくお願いします」
「はい、わかりました」
　座ったままの玲香が気もそぞろであることを心配した定信は、念のためにと注意を言い置いた。
「ひょっとしたら大門さんのお戻りに間に合わないかも知れませんが、その場合も何も言わなくて結構です。僕から説明しますので」
「……はい、済みません」
「これについては、僕の方こそ謝るべきです。本当に申し訳ございません。では、ちょっと行ってきます」
　軽やかに離れていくように見える彼の気持ちは、どんな状況なのだろうか。
　一方の玲香は、見るからに重苦しい雰囲気で、もらったチョコレートを口の中に放り込んでいる。
　結局そんな感じに、さらに二時間をぼーっと過ごした。
　半分くらいは翔子のことを考え、半分くらいは何も考えていなかった。
（翔子お姉様ぁ、玲香には、何を心配すればいいのかもわからないのですよぅ。はみゃぅ）
　考えることの根源にある気持ちは、彼女がここにいる資格でもあった。そう彼女自身が気付いているのかは、わからなかったが。
　彼女が物思いに耽る間も、執務室では開発作業が続いていた。時折深刻な話し声が聞こえるも、ひたすらにキーボードを叩く音が大勢を占めている。
　そんな中、突然目の前が賑やかになった。
「やたーっ、終わったーっ。花羽ちゃんチーム、シミュレータ完走っ！」
　花羽が立ち上がり、大声で知らせている。
「ぉー、やっと通ったかぁ」
「あー俺はもう寝るー」
「三井先輩さすがっす」
「金井ちゃんはリリースタグ打ってちょうだい、それが終わったら全員休んでよし。私はバグトラッカー見直すねー」
　明るい目の前を見て、本来の職務と言うよりは、気を紛らわすために声をかけようと玲香が席を立ったそのとき。
「お疲れ様ぁ。ぉ、なんか賑わってるわねぇ」
　花羽たちのチームの向こう、出入り口のドアが開いた。入ってきたのは翔子。そしてなんと、定信も一緒だった。
　その光景を見て玲香は、足をぴたっと止め、立ち尽くしてしまう。

「実務面でも彼女を欠くのは痛手です。代理を確保してから、でしょうね」
「いつ、言うんですか」
「彼女が戻ってきたら、すぐに。プログラムの完走予定時刻は十二時ですから、午前五時過ぎ、タクシーで向かってもらおうと考えています。六時間も一緒にいて何も起きなければ、さすがに言い訳もできましょう」
「何も起こらないことで問題は起きないんですか」
「もちろんです。起こさせないのが僕の仕事、そのように説明済みですし、あと二度や三度は、同じことを説明します。本意ではありませんが、状況をモニタする手段も準備します。そして最後は、僕が迎えに行きます」
「私に反対させるつもりは、なかったわけですね……」
問いを投げるたびに用意周到としか言いようのない回答が返ってきたことに、玲香は溜息をつくほかなかった。確かに翔子なら万が一もないだろうと思えてしまうところを含め、彼の計算通りなのは心理的に受け入れにくいところもある。
「言いにくいですが、その通りです。済みません」
とは言え彼は彼で、計算通りに事が運んだとは言え、望まぬことをしているのである。本当に溜息をこぼし項垂れたいのは、彼の方なのかも知れない。
すっかり湿っぽいテーブルになってしまったが、「食べましょう」と定信は笑顔を持ち直し、二人で味のないハンバーグセットを腹に収めた。
玲香は昼休みから戻った後も、手持ち無沙汰に自席でぼーっとしている。
同じくやることがなかったはずの定信は、隣で電話やメールに忙しい。突然の無茶に万全を期すべく、いろいろ手を回しているのだろう。
（そろそろお姉様からのお電話ですぅ……）
玲香は時計を見ながら考えたが、翔子が帰ってきたあとに伝えねばならぬことを考えると、気持ちは沈むばかりだ。
（お姉様は、きっと、断りませんの……。みゅう）
本人の意思確認で断られることが玲香にとっての最後の望みだが、誰かがどう考えても、その線は薄い。つまり、玲香の望まぬ結果は決まったようなものだ。翔子本人も積極的に望むであろうことが、胸を痛める大きな原因だった。
ぼーっと考えことをしていれば、一時間や二時間あっという間に経ってしまうもので、ぶら下げていた携帯電話が着信を伝える時間になっていた。
玲香は着信表示も見ずに、電話を取った。
「はい、早川です」
「ぁ、わたしわたしー。事故っちゃったから賠償金百万を振り込んで欲しいんだけど」
「あの、翔子さん、状況はどうなんですか」
「えー、玲香ちゃん冷たぁい怖ぁい。ま、そこにいるんじゃ仕方ないかしら？　展開状況に問題なし、予定通り十九時には完了しそうよ。しかしねぇ、コインロッカーをこれほど使ったのは初めてだわ。今更ながら、回収に行くのが面倒そうね。ぁ、電車来ちゃうから、じゃ、次はそっちでねー」
何も知らない翔子は、今度も陽気に、報告の電話を切った。

おっとお客、お仕事お仕事。
「いらっしゃいませー」
ジャンパーにジーンズ姿。ショルダーバッグをかついだサングラスのおじさん。
バッグにはでっかいバールのようなものを持った女の子が描かれている。麻緒がこよなく愛する漫画『チカリカ』のキャラクター〝進入少女ちかぼー〟。
おっさん、いい趣味してる。
何を隠そう、この間の最新刊はちかぼーネタだったんだよね。
「飛成……麻緒。あんたがヘンプコードか？」
「はい？」
なんでこの人本名知ってるかな。
「あんたの絵は最高だ。技術も演出も完璧だ。あえてりかぼーを外してちかぼー一人に絞ったのも卓見だ」
と、訪ねてもいないのに熱く語り出す。
「だが一つだけ決定的に足りないものがある」
「お客様？」
こらこら、ご託はいいからドーナツ買え、ドーナツ。
「だから……」
おっさんはずずいと身を乗り出して、重々しい口調で言ったと。
「次は必ずエロを描くように」
うわアレなヒトだよ。
「わたし高一なんですけど」
それに女の子の18禁は描かない主義。
「描かないとは言わせん」
おっさんのバッグから出てきたのは折りたたみストックのついた角張ったサブマシンガン。私の記憶が確かならスコーピオンとかいうやつ。
「またまたあ、ご冗談を」
「冗談でちかぼーの話ができるか」
片手で銃を構えながら左手でジャンパーのファスナーをおろすと、ずらりと並んだダイナマイト。
そしてポケットから取り出したのはライター。
店中が騒然とする。扉から、窓から、客も店員も我先に店から逃げ出す。
「ええと」
麻緒の思考力がそれなりに回復した頃には、店内には麻緒とおっさんの他には絵莉華だけになっていた。
マジですかい。
「それなりに善処しないこともありませんから、とりあえず武器をおさめていただけませんかね」
何しろはす向かいが警察署だから反応が早い。すでに周囲は機動隊に十重二十重に囲まれている。
なんて杜撰な計画だろう。
「ほら、刑務所じゃ同人誌なんて読めませんよ。ここは冗談で納めましょうよ」
「ならば今この場で描いてもらおう」
「へ？」
おっさんはバッグを足で押しやってくる。
「一通りの道具と資料は揃ってるはずだ」
あんたおかしいよ、おっさん。
これむしろ褒め言葉。

やり方に問題はあるけど、ここまで無茶をするような熱心なファンがついたというのはある意味作家として誇っていいんじゃないだろうか。

いや、自己欺瞞なんだけどね。

ハイになってるって自分でも分かっていながら、

こういうのをストックホルム症候群とかいうんだろうな。

「アシスタントやるね」

絵莉華は分かってくれてる。さすがわが相棒。

「決まりだな。暖めてるネタがいくつかあるのだが。こういう設定はどうだろう」

と、バッグから紙が大量に継ぎ足された分厚いメモ帳を取り出す。

あんた編集かよ、おっさん。

「今だ、吶喊！」

！

不用意にライターを手放した瞬間を狙い、ドア・窓を破って機動隊が突入してくる。

タイミング悪すぎ、ばかやろ〜！

要求にさえ応えればおとなしく捕まってくれた可能性が高いのに。

「もはやこれまで！　ちかぼー万歳！」

「ちょ、おま、うわ！」

ちょっとは躊躇しろ！

案の定、おっさんはダイナマイトに銃弾を押し当てて……

```
$ su Elica
$ usermod -U Saya
$ usermod -a bareblade -w "a pencil" Elica
$ usermod -w sword Elica
$ su spectator
```

一歩進み出た紗也が中年男の前に手をかざすと、男を包むようにシャボン玉のような球体が発生した。

直後、ごうん、とくぐもった爆発音とともに球体が赤熱する。

爆炎を含んだ球体は小揺るぎもしない。破裂するどころか空中に浮かんだままソフトボール大にまでぐんぐんと収縮する。

「あそれ、かっき〜ん！」

そこを絵莉華が両手持ちの長剣を豪快にフルスイング。完璧なフォームの一本足打法。

剣の腹で強打された爆炎球は破られた窓を抜け、警官隊と野次馬のど真ん中へと突き刺さり。

大爆発。

あとはご想像の通りの死屍累々。食事がまずくなるので描写は割愛。

```
$ su Elica
$ usermod -L Saya
$ usermod -a "in the sheath" -w bareknuckle Elica
$ su Marin
[Marin@May8(Thursday) /Tamasaka/on the way to Tosawa high school at Matoya/on the sidewalk]$
```

「なにもしてないったら」

みみみはそう言う。

「僕も。ただただ観察してるだけさ」

た。残念ながら他に手がありません」

「他に手がないって……。代替案は何だったのですか？」

玲香は表情もすっかりきつくなり、今や目の前のパートナーが敵だとでも言わんばかり。

一方の定信は相変わらずの柔和な表情で、淡々と話を続ける。

「僕たちが対価を得てシステム構築するように、対価を渡せば身体を提供してくれる方もいます」

「……そうですか」

「現実問題として、僕は誰を出すか考えています」

「そんな、出すだなんて」

半ば身を乗り出して抗議した玲香の横に、ウェイトレスがやってきた。

タイミングよくやってきたウェイトレスにやむを得ず身を引きながら、運ばれてきた日替わりランチ二つを受け入れた。

「あ、ありがとうございます」

ウェイトレスに笑顔を送る定信を見ると、玲香はまるで自分の意見が軽視されているのではと少しいらついてしまう。

引き続き「いただきます」と言い、あえて空気を読まずにハンバーグを切り分け始めた彼は、玲香の心中を当然察して爆発する前に牽制した。

「最低な話ですが、要は、何も起こらなきゃ両者にとってプラスでしかありません。加えて、その女性自身も乗り気なら文句なしです」

「そんな人いませんよ」

自分の気持ちの行き先を読まれているような感じに玲香は悔しさを覚えながら、受け入れがたいことには変わらないと反論を続ける。もちろん彼女は、フォークとナイフにすら手を付けていない。

一方、ホイホイと食べ進める定信は、柔和な表情を変えずにカードを切った。

「どうでしょう。大門さんなんか、乗ってくると思いますけどね」

「っ、お姉様はダメですっ！　――あっ」

「お二人の関係はさておき、彼女であれば脂ぎった中年オヤジの一人や二人、いざとなれば薙ぎ倒せるでしょう。物理的に。女性が男性より弱いなんて、それこそセクハラですよ」

慌てる玲香をどうすることもなく、定信は突然食器を置くと、初めて表情を崩した。突如、険しい顔だ。

「僕にできることなら、僕がどうにかするつもりでした。しかし、こればかりは、何とか、お願いします」

懇願を言い切ると、スパッと勢いよく頭を下げ、その状態を維持している。

「頭を下げても無駄です、なんて私が言えないことを、知ってて やってますね……？」

「いえ、これは本当に、です。本来、この手の問題は、僕が片付けなければなりません」

未だに頭を下げ続ける定信に、玲香も白旗を揚げるほかなかった。彼女の言う通り、これがたとえ作戦通りだとしても。

「わかりました。でも、翔子さんの意思は尊重してください」

「もちろんです、ありがとうございます」

重々しいだけで喜びの欠片もない言葉とともに、ゆっくりと彼は頭を上げる。再びトレードマークたる柔和な表情に戻るも、どこか悲痛な影が取り去れていない。

――ツーッツーッ……

呼が切断されたことを伝える無機質な音が、玲香の耳に届いた。

「はぅ、お姉様までぇ……。でもでも、玲香はがんばりますっ。早く帰ってきてくださいですよぅ」

届くことのないメッセージを放ちながら、ぬるくなりつつあったミルクティーを一気に飲み干す。

重たい鉄扉を開き屋内に、執務室に戻ると、コートを着たままの定信が玲香に駆け寄ってきた。

「早川さん、お昼食べました？」

「いえ、食べてませんけど……」

「それはちょうどいい。食べながら話をしましょう」

玲香の態度が微妙なのも気にせず、無理矢理に誘う形でエレベータに乗り込んだ。

「何を食べましょうか。あまり食欲がないようでしたら、軽いものが食べられるところにしましょうか」

定信は玲香の表情から昼食気分でもないことを見抜いていたが、それでも外に連れ出した。

その態度には腑抜け気味の玲香も感付き、何かあるなと重たかった気持ちを切り替え、答える。

「何でも結構です。少し遠くの方がいいのでしょう？」

「ええ。さすがは早川マネージャ」

扉の開いたエレベータから出ると、無言のまま数ブロック先まで歩き、ファミレスに入った。

「昼にファミレスってのも味気ないですが、まぁ、我慢してください。ぁ、僕は日替わりランチで」

「じゃあ、私も日替わりで」

適当に注文も済ませ、玲香はキリッと座り直した。定信はすっかり脱ぎ忘れていたコートを脱ぎながら、彼女の様子を見ると前置きなしで切り出した。

「まいりました。まさか僕の予想をあっさり超えられるとは」

「呼び出された件ですか」

「はい」

彼は一言返事をすると、出てきた氷水を一口飲んで、話を続ける。

「ビーコンの要求は予想通りでした。が、まさか女性もセットでとは恐れ入りましたね」

「……あの、それって」

「お察しの通りです。システムの稼働効果は再度説明差し上げたのですが、何を考えているのやら。いやはや、考えていることは一つなんでしょうが……」

玲香だったら言い淀むであろう内容も、もちろん性別によるところもあるだろうが、あっさり言い切ってしまうのは定信だからだ。彼女と二人一組で管理の任に就いている意味は、ここにもある。

しかし二人一組というのには弊害もあり、時に意見が分かれる。

「私は許可できません」

今までは彩度に欠けた声だった彼女が、ビビッドに反応する。

「そうおっしゃると思っていました。もちろん僕もそう思っていますが、状況を考えるとここで逆らいたくないのも事実なんです」

「セクハラですよ、そんなの」

「ええ、それは百も承知です。語弊を恐れずに言えば、『女性の調達法』という観点で代替案も提示しました。が、却下されました。

盛岸先輩もそう言う。

「観測行為自体も影響与えるんですけどね」

それに、存在自体も。

だからこそ絵莉華はああなのだ。

「貴方たち、もっと地味になれませんか？」

「オマエモナー」

異口同音に言われてしまった。

```
$ su Mao
[Mao@May9(Friday) /Tamasaka/Hinari's house]$
```

「最近、前にも増してトラブル多くない？」

黒板消し落下事件（かわりに絵莉華に直撃）。

タンクローリー爆発事件（間一髪。死傷者十数人）。

挙げ句が明らかに麻緒個人狙いの漫画脅迫犯。投降中に爆薬が暴発して警官含む死傷者多数。

明らかにエスカレートしてきている。

脅迫犯の件では警察に事情聴取はされるわ。

マスコミなんて私に責任があるみたいに言ってるし……

これで落ち込むなっていうのが無理だろう。

「人気者ってのも辛いわー。ＤＱＮにも危険にも好かれてる気がする」

「カリスマってのは諸刃の剣だしね」

絵莉華は頭を撫でて慰めてくれるが……

「くー、このあふれる才能と美貌が憎いね。トラブルの方が私をほっとかないぜ」

軽口を叩いてみたけど気が晴れない。

売れっ子作家になれたのは嬉しいけど……ねえ。

あまりにも騒がしく危険な毎日に嫌気がさすばかり。

ドキドキワクワクを通り越して気の休まる暇がない。

「同人やめよっかな。わざと野暮ったい格好して、ひっそり暮らそうかな」

「お姉ちゃん？」

情熱が冷めた訳じゃないけど、せめてほとぼりがさめるまでは。

地味に。ひたすら地味に。

「目立たない生き物になって、退屈でも平穏な日々を過ごしたいよねえ」

```
$ su Mao
$ usermod -a "a beginner coterie-writer" Mao
$ usermod -L Elica
$ usermod -L Morigishi
$ usermod -a "shinto priest" -l Kajiki Marin
$ su spectator
[spectator@July7 /Tamasaka/Hinari's house/Mao's room]$
```

飛成麻緒（ひなりまお）、高校一年生。

一人娘の麻緒は近くの私立高校に通う。バスや自転車は許されないが歩くのもきつい半端な距離を徒歩通学。

足りない背丈にスタイルはそれなり。顔立ちはかなり可愛いと言われるけど、自己主張は苦手。伊達メガネでナイーブな自己を隠蔽保護中。

密かに個人サークルを主宰する駆けだし同人作家。

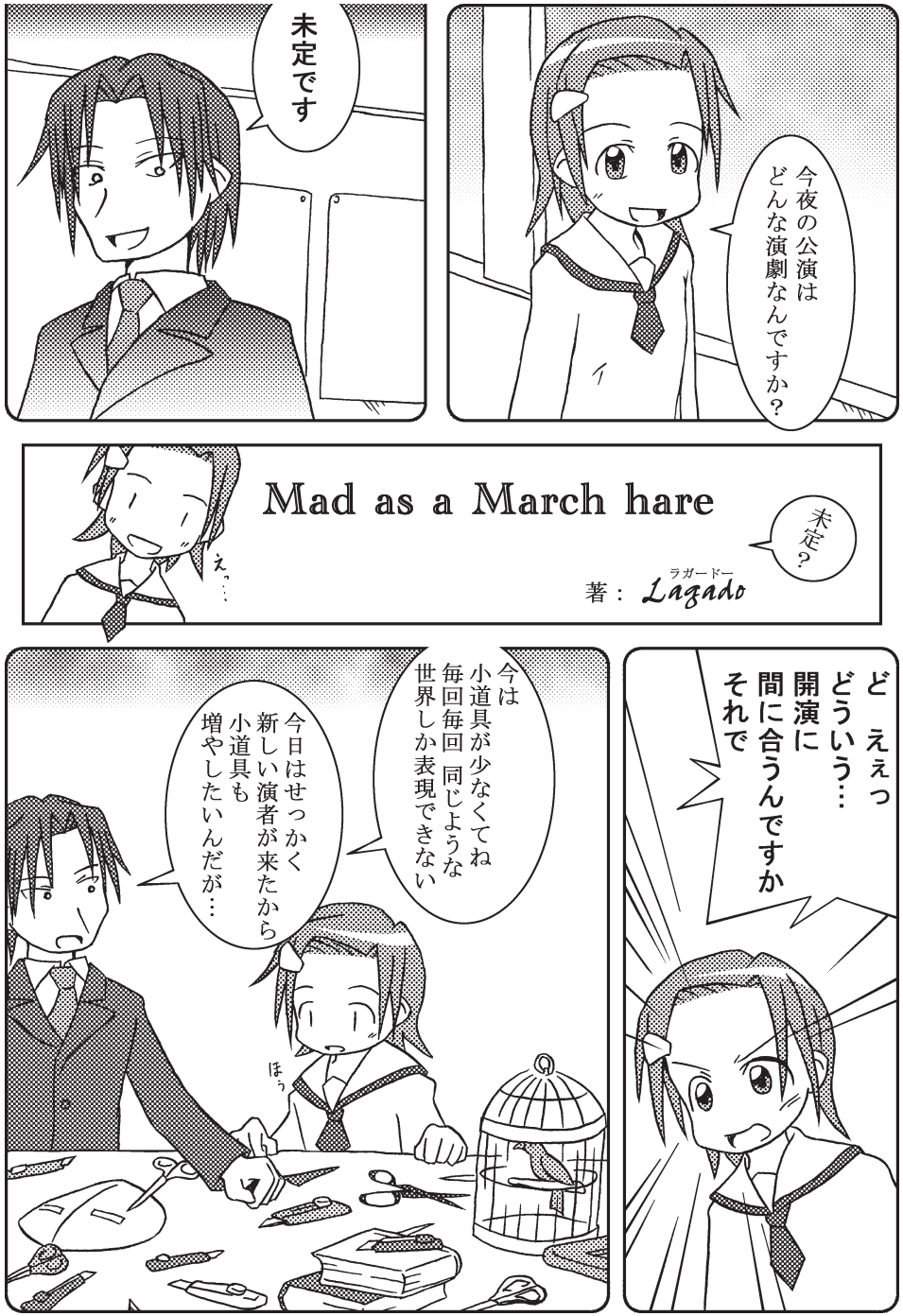
今はまだ、変化に乏しい生活を嘆く毎日だが……
波瀾万丈の日々を願って神社を訪れる日もそう遠くないだろう。

$ exit

で多少は調子がいいぐらいに思っていたので、不思議な感じで答えている。
尤も、疲れ気味で当然という前提はあるのだが。
「ならいいけど。あんま心配するなよ」
「それは無理……」
「なぁに、成功しようが、失敗しようが、明日で終わり。気楽なもんだろ？」
本当に気楽そうな総一に、玲香は羨ましさと言うより恨めしさを感じそうになったが、これからが大変な立場の彼に言われては、言い返すのもおかしい。彼女は仕方なく、適当な返事で濁す。
「まぁねぇ……」
そう来るだろうと総一も読んでいたのだろう。すかさず一言を返し、会議室を先に出て行った。
「心配しすぎないのも仕事のうちだ」
一人残された玲香は余計に心配になりながらも、明かりを消して部屋を出た。

案の定、その後一時間、二時間と玲香は暇で何もせぬまま、昼休みのチャイムはさっき鳴った。
昼食を食べる気にもならず、自販機でミルクティーを買って、非常階段の踊り場でぼーっと外を眺める。年末だというのに、それとも年末だろうか、目の前の通りの人通りは多いようだ。
早くも存在を忘れかけていたミルクティーのプルタブを引いたとき、首から提げていた携帯電話が着信音を奏で始めた。
――着信：大門翔子
表示を見て慌てて通話ボタンを押す。

「はい、早川です」
「やっほー、玲香ちゃん、元気ぃ？」
予期せぬ陽気な声が聞こえることに戸惑いつつも、質問には素直に答えてしまうのが玲香である。
「はぅ、元気じゃないですよぅ」
しかも人目のない場所となれば、お姉様と秘密のお話になってしまう。
「あらあら、どうしたの？」
「だってだってぇ、やることないんですよぅ」
「なるほどね。ま、それも仕事のうちだから」
「みゅぅ、みんな同じこと言うのです……。お姉様まで冷たいのですぅっ」
くたびれたタイトスカートを纏った女性が、缶のミルクティー片手に屋外階段の手摺りにもたれ、電話をする。割とビジネス感漂うシビアなシーンだが、会話はだだ甘だった。しかも「暇」と言うなど、他のメンバには決して聞かせられない。
「あー、そんなこと言うと戻ってあげないわよ？」
「はみゃぅ、ごめんなさいごめんなさいぃ」
玲香自身が気付いているかはわからないが、翔子は他のメンバ側の人間であり、今日も多忙だ。玲香を邪険に扱うわけではないが、今は早めに電話を済ませようとした。
「よろしい。本題の報告だけど、問題ないわ。予定通り展開中。じゃあ、電車来るから、またね」
「えっ、ぁぅ、お姉様、ちょっと待ってくださぁいぃ」
「ぁー、ごめん、電車来ちゃったから。じゃあね、いい子にしてるのよ」



ヴイヴと呼ばれていた一日が始まった。

「各チームともテストフェーズに入っており、実際のところ『バギーながら動く』状態にあります。配信ビーコンの展開は予定通り行われており、展開されたものとの通信状況も良好です。最新の予定に対し、問題はありません。踏まえて、何か報告、連絡事項はありますか」

十時ちょうどから始まった最後の進捗確認会議。

十一名が集まった会議室に先ほどから響くのは、たった一人、玲香の声だけだった。

本来ならばコードフリーズなどとっくの大昔、今日は深夜リリースに備え昼寝でもする日であったが。今更そんな理想との比べっこをしている者はなく、未だに安定しないコード、完走するかわからないプログラムとの戦いが続いている。

「特にないようであれば、予定に変更はありません。遅くとも十五時からはシミュレータに流し、ショーストッパーがないことを確認。十八時までにリリースバージョン1のタグを打ち、監査にその旨連絡してください」

みな無言で玲香の言葉を聞いていたが、雰囲気はここ数週間で最もいいかも知れないと、彼女は感じていた。何はともあれ、リリースに挑戦できることが明らかになったこと、最悪でない状態で出口が見えてきたことがプラスに働いているのだろう。

張り詰めながらも重たくはない空気の中、初めて玲香以外が口を開いた。指示に出ていた監査チームの総一だ。

「監査ではもらったプログラムを再度シミュレータに流しつつ、まずはそのまま配信サーバに転送します。同時に担当チームリーダと次に修正すべきバグを検討します。場合によっては、零時のリリース前に、配信サーバのバイナリを差し替えることもあり得ます」

総一は一息に話すと、隣に座る玲香に目配せし、バトンを再度渡した。

「予定通り、明確なコードフリーズは行いません。稼働後のホットパッチも必要であれば行います。品質管理としては最悪かも知れませんが、そんなことを言ってられる状況でもありませんので……」

玲香も一息に、言い切った。

マネジメントを担当するものとしては英断とも言える発言だったが、プロジェクトとしては既定路線。もはや誰も、驚きはしなかった。

「それでは、あと半日、がんばりましょう。次は二十時の最終確認です。よろしくお願いします」

予想通りの穏やかな反応に、玲香は会議終了の合図を出す。そして、十人一色の声が帰ってきた。

「よろしくお願いします」

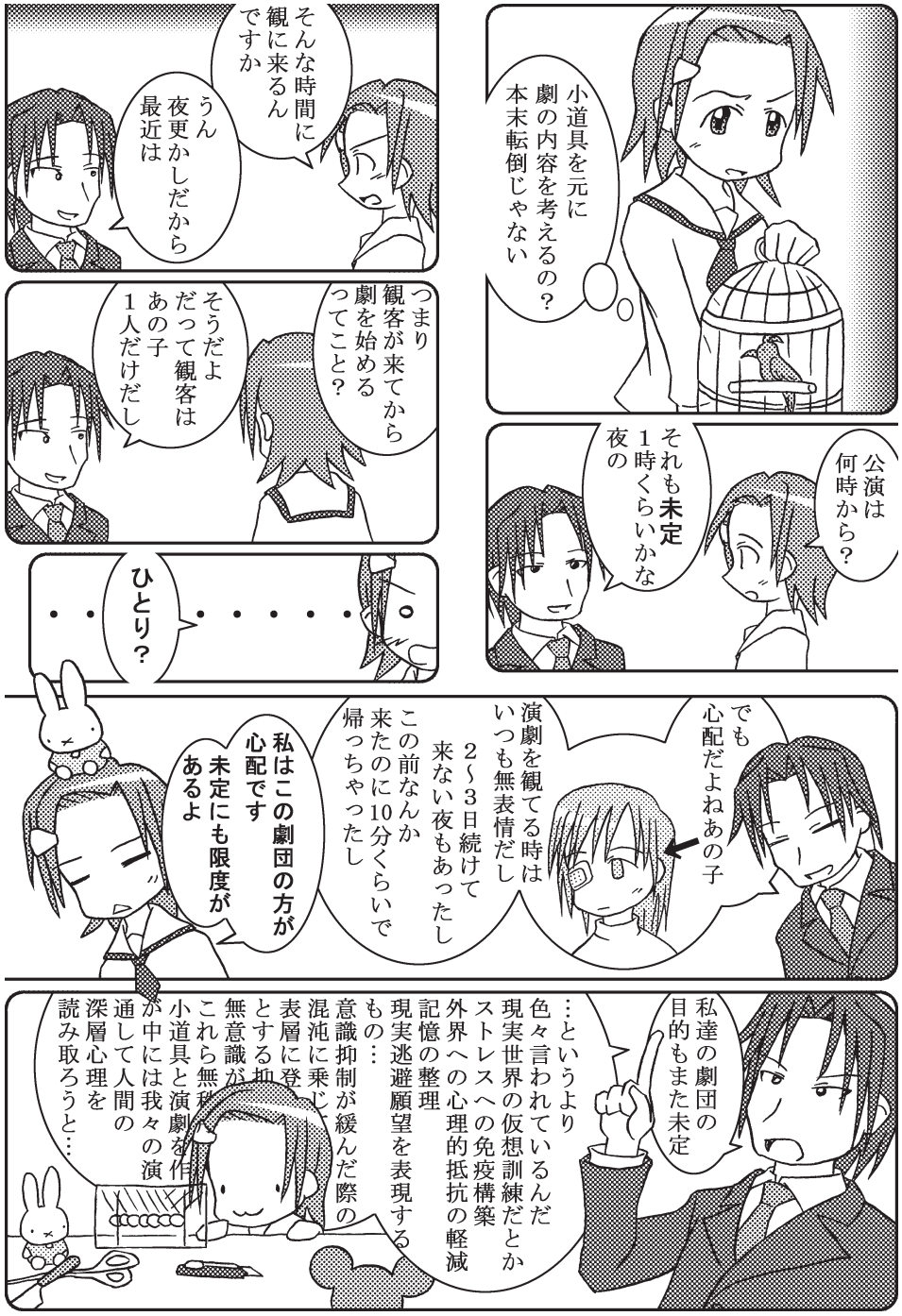
会議室を出た面々が足早に執務室に戻る中、玲香は呼び止められる。

「顔色悪いけど、大丈夫か？」

部屋を出ようとするところを、肩を捕まえ止めたのは総一だった。

「そう？　特に体調が悪いとかはないんだけど……」

玲香自身は特に不調を感じていなかったし、むしろ昨日の一件



玲香が改めて定信に詫びると、それには及ばないと彼は首を振っている。

「どちらか一方がいれば、今日の僕たちの仕事はできますからね」

「えっと、今日のスケジュールは……」

「十時からの進捗確認会議と、二十時からの最終確認だけですよ」

あたふたとスケジューラを開く玲香に、定信があっさりと答えた。

答えが返ってきた直後に開かれたスケジューラも、確かにそう示している。

「ぁ、ありがとうございます。……なんか、落ち着きませんね」

「今日、明日の我々の仕事は、悠然と構えていることです」

「そう、なんですか？」

「はい。我々があたふたしていては、士気に関わります。そうですね、何か起こったときに英断を下すための、英気を養っているとでも思ってください」

「そうですね」

今晩、開発してきたシステムはリリースを迎える。

その状況下において、あれこれとスケジュールが入っている方が不自然ではあるが。目の前の開発陣が未だ必死で端末に向かっているのを見ると、玲香は自分の予定がが空きなのを申し訳なく思ってしまう。

そして「悠然と構えることが仕事」と言った定信にはそれ以外の予定があるらしく、鞄を取り出し外出の準備を始めた。

「あの、勅使河原さんは外出ですか？」

「はい。パトロンの神谷氏に呼ばれまして。こんな日に僕ご指名というのは、ろくな用でもないでしょうが、出資者には逆らえません」

定信は苦笑気味に説明しながら、愛用の薄いブリーフケースに、筆記用具と何やら小さな段ボール箱を入れている。普段からそんなものを持ち歩くわけないと言える不似合いさで、玲香もふと疑問に思った。

「あの、それ、何ですか？」

玲香の疑問に、定信はブリーフケースの口を綴じながらあっさり答えた。

「ビーコンです。先ほど大門さんから分けてもらいました。おそらく、これが欲しいんでしょう」

「へぇ、そうなんですか」

「欲の皮が張ったおじさまの考えることです、媚薬か何かと勘違いしているのでは」

定信への依頼の連絡は、おそらく「話がある」程度の内容だったろう。そこから突飛とも言える具体的用件を予想するのは、さすがと言うべきだ。名実ともにこのプロジェクトのトップに立つ、異能の者とは彼のことだ。

しかし、玲香には少し、いや、だいぶ割り引いて映ったらしい。

「……男の人って、大変ですよね」

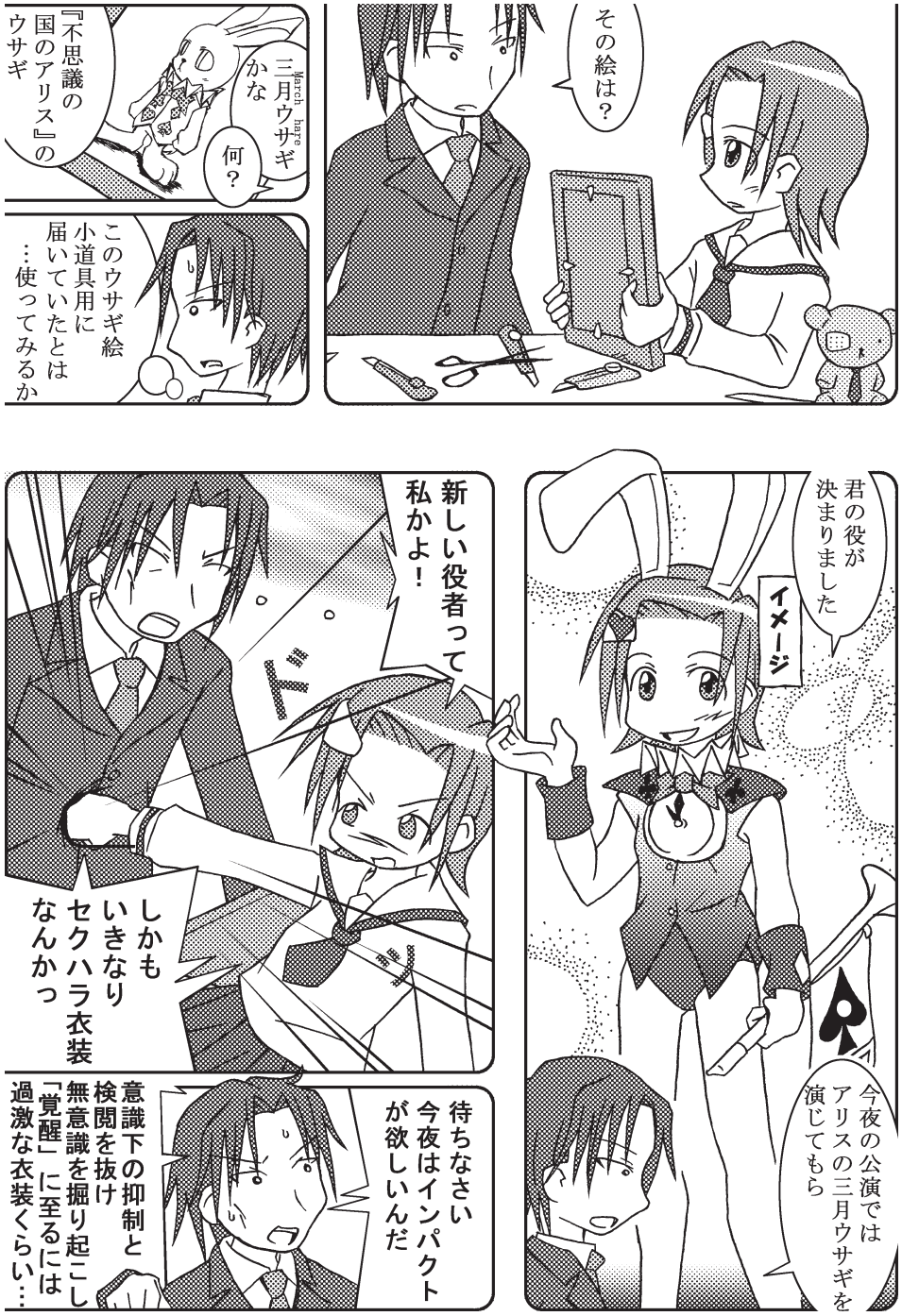
同類の共感ですかとでも言わんばかりの白い目だ。

大抵の物事に動じない定信もこれにはかなわぬと判断したのか、軽く否定しつつもそそくさと場を離れる。

「変なところで同情しないでくださいよ。では、行ってきます。昼には戻りますので」

「お気を付けて。行ってらっしゃい」

時刻は九時十五分、玲香たちの長い一日、かつてクリスマスイ



翔子とのひとときを反芻し、頭の中は翔子だけという状況で眠りについたことはすっかり忘れてしまったらしい。

ロッカールームに入るとブラウスだけは予備のものに替え、スカートは皺になっていようとやむを得ずそのまま。

次はトイレの洗面所で顔を洗い、化粧水を付け、唇にリップクリームを滑らせて出勤の準備完了。玲香は元々あまり化粧をしないので、こういうときは楽である。年齢より幼く見える一因でもあるが。

「おはようございます」

執務室に入ると挨拶をしながら自席に着く。社内自販機で買った缶コーヒーを飲みながら、いつも通り端末を起動している。

（さて今日は……）

と一日のスケジュールをチェックする間もなく、声が飛んできた。

「おはよ。玲香ちゃん」

声の主は翔子で、今日は珍しくビシッとスーツを着込んでいる。

彼女がリーダを務める、ハードウェアからファームウェアまでを担当するビーコンチームでは、メンバ全員がライトブルーの作業着を着ていた。ハードを直接触ることの少ない彼女も例外ではない。

「あっ、おはようございます」

「よかった。お仕事中の玲香ちゃんに戻ってる」

挨拶を返してきた玲香が予想通り、蕩けた玲香でないことは翔子にとって残念だった。

一方の玲香は、昨日のことを思い出して顔が赤くなっているのを自覚した。今思えば、なんで昨日に限って表に出してしまったのだろうと後悔すらしそうなところだ。

「っ……、えっと、あのー、ぁ、そう、ごめんなさい、まだメールが見られていないんです。展開のことですよね？」

「えー、つまんなーい。ま、いいわ。ご明察、ビーコンの準備は完了。予定通りこれから展開に向かいます」

「わかりました。えっと、展開スケジュールは……」

翔子がスーツを着ていたことから、予定されていた外出であることまでは推測できた。しかし端末が起動していない以上、メールで送られているであろう最新の詳細情報については言及しかねる。

そんな状況を察して、隣の定信が助け船を出してきた。

「メールで来ていた最終版、確認しました。問題ありません」

「あっ、ありがとうございます」

玲香はお礼を言いながら、起動した端末の操作を操作した。翔子からのメールを開きスケジュール表のマイルストンに何とか目を通す。

「では、気を付けて行ってきてください。えっと……、翔子さんの戻りは十七時ですね」

「ええ。展開状況の把握はメールにある方法で。こちらからも十二時、十五時に電話で中間報告をするから」

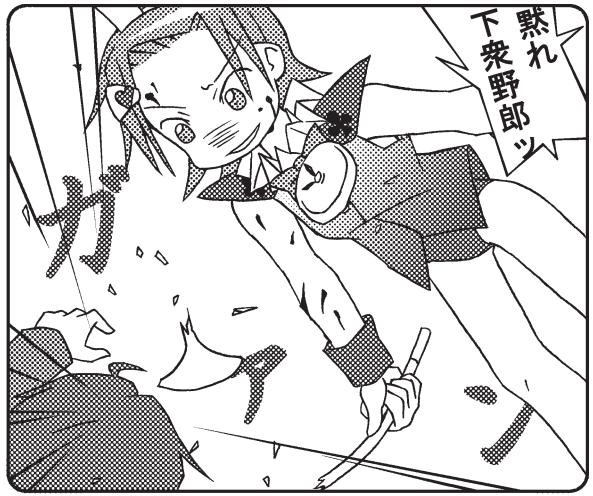
「はい。わかりました。行ってらっしゃい」

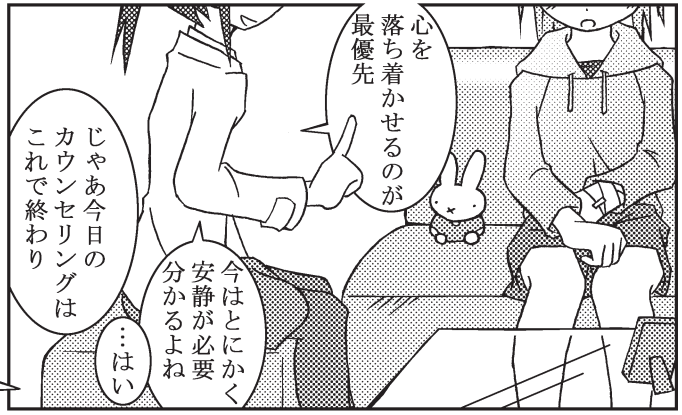
「成功を祈っててちょうだいね、二人とも。では、行ってきます」

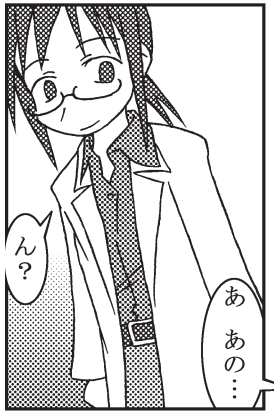
「成功を祈ります。行ってらっしゃい」

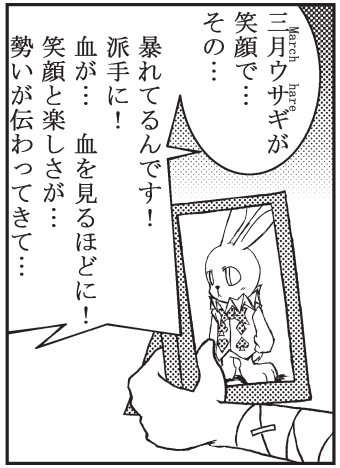
玲香と定信が見送る中、ライトブラウンの後ろ姿が颯爽と執務室を出て行った。

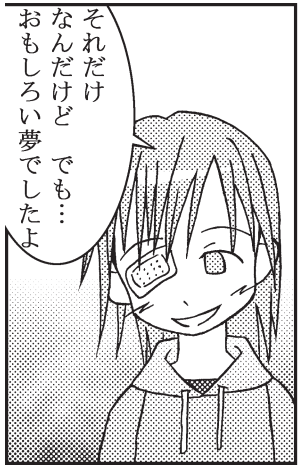
「済みません、寝坊をしてしまって」











「もうっ、いたずらっ子はめっ！」

そう言いながらも、次にはぺろっと舌でも出しそうなお姉ちゃん。

改めて絞り直したタオルで玲香の身体を拭き、自らの身体も拭く。そして二人はまた手をつないで、脱衣所へと出て行った。

銭湯から出ると、当然のように冷たい北風が吹いている。

「うー、寒いですぅ」

玲香は身を縮こまらせて、翔子にくっついていた。

くっつかれていた翔子も温かくて心地よかったが、ここに突っ立ってては寒くなるばかりと心を決めて玲香を離した。

「ほら、湯冷めしないうちに戻りなさい」

「はぁい。ではでは、翔子お姉様、また明日ですよぉー」

「また明日。気を付けて戻りなさいよ」

「はぁーい、お姉様もお気を付けてぇっ」

顔をこちらに向けたまま、ぶんぶんと手を振りながら後ろ向きに歩く玲香。

仕事中の彼女なら心配もないが、今の玲香ではいつ転ぶか気が気でない。翔子は手を振るのに応じながら、彼女が角を曲がり姿を消すまで、しっかり見守ってしまった。

――ピピピピピピピピピピピピ……

翌朝、玲香はけたたましい電子音に起こされた。

「ふぁぅ、ぁ、ん……」

「済みません、早川さん。起こしちゃいましたか」

会議室を潰し作られた仮眠室。

この部屋にはベッドが三台あり、玲香は右端に寝ていた。今、目覚ましを鳴らしたのは、真ん中のベッドで寝ていた誰かのようだ。まだ寝ぼけている玲香は、誰なのかわかろうともしなかった。

「ぁ、いいんです……。今……、何時ですか」

「八時半です」

彼女はすでに目を覚ましたのか、翔子の問いにキリッとした声で応える。

「ぁー、寝過ぎちゃった……」

「それでは、私はお先に」

「えっ、あ……、うん。ありがと……」

彼女が部屋から出て行くと、玲香はぼーっと上体を起こした。

（早くしなくちゃ。せめて定時には間に合わせないと）

予定よりも寝過ぎてはいたが、連日の疲れで言うまでもなくまだ眠い。ぬくぬくお布団の誘惑にも抗いがたい状況だが、何とかベッドを離れた。

（あー、着たまま寝ちゃったんだ）

玲香は視線を下げると、自分の服装がタイトスカートにブラウス、仕事着のままであることに気付く。

（昨日は、その、えっと、お姉様とお風呂に入って、……どうしたんだっけ？）

彼女は職場に戻ってきてから、気付かぬうちに寝てしまった。

今日、世界を取り戻します

Fukapon

「ったくどこのあほよ。バグを平気で作り込む無能は」
「ど、どこって、そこは三井さんのチームですよね……」
「だから言ってんのよっ。早川さんもこのグラフ見ればわかるわ」
「あちゃー、こりゃひどいですね、この二週間で鰻登りですよ」
「えっと、あの、これ、バグ修正数、じゃないんですよね……？」
「当然でしょ、バグ発見数よ。いくら間に合わないからって無能ばっかつっこみゃこーなるっつーの」
「確かに、三井の言う通りではあるね。この期に及んで人を突っ込んでもうまくはいかない。けど、使い方にも問題があるんじゃないか」
「人が足りないのは事実ですし、他のチームにおけるバグの推移を見る限り、三井さんの捌きに問題があるんじゃないかと……」
「はぁ？　私に問題あるって、どの口が言ってんのよ？」
「三井、落ち着け」
「十分落ち着いてるっつーの。無能は何やらせてもダメなんだからとっとと切ってよ。つか、もう、あいつらに仕事振らないから」
「わかりました、三井さん。投入した五名は他に再配置します。そうですね……」
「私のところに三名、どうかな」
「ぇ？　総一のところ？　構わないけど……」
「ここのところの全体品質低下で、単純なテスト要員不足なんだよ。コード監査チームでどれだけ書き直しているか、三井なら知ってるよな？」
「っさいわね。あたしが悪いんじゃないわよっ。全てはあのバカどもが……」
「はい、皆さん、お静かに。約三十時間でクリスマスイヴ、つまりリリース日です。もはや力業以外にない状況でしょうが、何とか持ちこたえて、あるべきイヴを取り戻しましょう。進行上何か問題があれば、迷わずすぐに、僕か早川さんに申し出てください。以上、会議を終了します」

しかめっ面が並んでいた会議が半ば無理矢理に打ち切られると、今や机と椅子が使える唯一の会議室から、十名ほどの男女が出てくる。

あるものは階下の、端末と書類、そして絶望が山のようになった執務室へ。

あるものは隣の、机の代わりにベッドの並べられた会議室へ。

戦地へ赴くかのように、重い足取りで消えていった

その中の一人、会議中には弱腰ながらも罵声に対応していた彼女は、重たい鉄扉を開け、非常階段の踊り場に佇んでいた。

「ここから見える東京は、こんなにも光り輝いているのに……」

十九時の東京、最も光り輝いている時間帯かも知れない。

「そうね。ご親切にも、赤と緑のイルミネーションすら見えるわ」

「翔子さん」

驚いたように振り返った彼女、早川玲香（はやかわれいか）の視線の先には、夜風に吹かれる黒髪を押さえ、にっこり微笑む女性がいた。

「ま、たまには息抜きも必要よ。これ、飲む？」

翔子は洗い場に玲香を立たせたままに、シャワーを手にする。

蛇口をひねり出てくるお湯の温度が落ちるのを確認。さて玲香に浴びせようとしながら。

「じゃあ、冷たいけど我慢してね」

にやり。彼女はシャワーをためらいなく玲香の背中に向けた。

「きゃぅっ！　つちゃっめぁたーいなぁにゃぅっ！」

「だから言ったじゃない。『冷たい』って」

「みゃつぅみぇちゃぁーはっっぅっ」

予期せぬあまりの冷たさに叫ぶ玲香を全く気にせず、翔子は彼女の背面全てにまんべんなく水を浴びせた。

首、背中、腰、おしり、太腿、ふくらはぎ、そりゃもう抜かりなく。

足首までたどり着き一段落、安心している玲香だが、すぐに恐怖は戻ってきた。

「はい、こっち向いてね」

翔子は玲香の肩を引っ張り、多少無理矢理に方向転換させると、胸からお腹、脚へと冬の冷や水を浴びせた。

「きゃみゃぅきゅぁふぁっぁあぅみゃぅっ」

「はい、おしまい」

予想を超える叫びように翔子はおもしろくて仕方ない。声にこそ出さないが、今にもけたけたと大笑いしそうな風である。玲香にはその顔が、いたずらをしたあとの顔にしか見えず不満でいっぱいだ。

「はぁはぁ、ひ、ひどいですぅ、お姉様ぁぅ」

「湯冷めしないように、仕方ないでしょう？」

「ぅー、でも笑ってますぅ」

「あら、まぁ、ほら、玲香ちゃん可愛いから」

翔子の言い訳はすでに、いたずらしましたと言っているようなものだが。

そうであろうとなかろうと、玲香は引き続き不満げ。

「みゅぅ」

「ほら、身体拭くからいらっしゃい」

「笑ってますぅ。お姉様だけ、ずるいですぅ！」

にやけながらも幕引きにしようと、タオルを絞り出したとき。

「ぇぃっ！」

玲香は手近なシャワーを握ると同時に翔子をロックオン、蛇口をひねった。

「きゃっ」

勢いよく放たれる冷水が、翔子の胸を捕らえた。

「ちょ、ちょと、冷たいっ。やめなさいっ」

攻撃に曝される胸を守るべく両腕で覆うと、今度は両腕が冷たい。

「やぁですぅ。だってだってぇ、お姉様が湯冷めしたら大変なのですよぅ」

玲香は翔子がそうしたように、だんだん下部へ放水先を移動させ、結局翔子も、全身に冷水を浴びてしまった。

「わかった、わかったわよぅ」

「やたーっ、えーい、たくさん冷たくしちゃうのぉーっ」

諦めて背中を向けた翔子に、ご機嫌の笑顔で玲香は水をかけた。

「はーい、おしまいですのっ」

放水が止むと、きっと玲香は笑っているのだろうなと、翔子は自らも笑顔で振り向いた。

やっぱり玲香は、嬉しそうにしている。

手渡されたミルクティーを受け取る玲香の頭に、ポンと手を置き、くしゃっと撫でる。お姉さんと言うよりお兄ちゃんっぽいところがある彼女、大門翔子もまた、会議室にいた一人である。
「ありがとうございます。いただきます」
（きゃんっ、翔子お姉様に撫で撫でしてもらっちゃったの、玲香ってば幸せできゅんきゅんしちゃうよー）
ミルクティーを口にしてその甘さのように溶けた表情、異常に中身がどろどろに溶けてしまっている玲香。優等生タイプの彼女だが、中身はこんなものだった。それを知ってか知らでか、翔子は玲香にぴったり並び、手摺りに頬杖をついた。
「信じられる？　この煌びやかな世界には欠陥がある。それももう、二年近くも前から」
彼女は玲香と同じく、眼下を眺める。
いや、先ほどまでの玲香と同じく、である。
（きゃんっ、翔子お姉様と玲香ふれあってるのー、きゅードキドキきゅんきゅんなのー）
と思っていることが傍目にもわかりかねない、キラキラさせた彼女の瞳は下ではなく右を向いていた。が、その視線が不自然でないように答えるの女性こそ、問題解決を得意とする敏腕プロジェクトマネージャ早川玲香、二十八歳だ。つまりこの職場での彼女だ。
「ここからはわかりませんけど、街の通りを眺めれば、私たちには不自然に見えます」
淀みなくまじめに答えた彼女の実力は確か故、その心の中を知るものはいない。はずなのだが、元来の性分なのか、はたまた実は知っているのか、玲香が苦手な方にからかうのは翔子の日常であった。
「そして、その辺のホテルはめっきり減った、と」
「……そ、そうですね」
優等生のステレオタイプとでも言わん弱点に、玲香は顔を真っ赤に俯いているが、翔子は容赦がない。ぐいっと玲香の顔を覗き込み、にやりと話しかけている。
「あらあら、玲香ちゃんは相変わらずおぼこさんだこと」
玲香にしてみればまさに、複雑な状況である。
（っ、はっぅー、そ、そんな、しょ、翔子お姉様っ、顔近いですぅ、ラブホテル行きたいですぅ、なんて思ってないですぁー嘘です嘘やっぱり行きたいですぅけど思ってるなんて言ってないですぅー）
普段から壊れ気味なので差のわかりにくい心中だが、相当壊れているのである。それでもやはり避けたいのは誤解。そう、彼女は一途なのだから。そこはハッキリせねばならないのだろう。上目遣いに涙目に、ちらちらと真っ赤になった頬とともに翔子に訴える。
「ぅー、それ、みなさんの前で言わないでくださいよ？」
「何を言っちゃダメなのかしら？　未経験ってこと？」
「そ、それもです……」
にやにやと追及の手をゆるめない翔子に、ここで視線を外して切なさをアピール。と言うよりは単純に、空に向かって決意を新たにする玲香。
（私は、翔子お姉様に全てを捧げるって決めたですのっ！）
「ふふぅん、片想い？」
対する玲香はついに、「言わないとお姉さん許さないぞ」の羽

玲香は温かなお湯と翔子に包まれて、ぬくぬく至福の笑顔。
「そっかぁ、じゃあ、ぎゅーってしてあげちゃうっ」
翔子は玲香の肩の上から自らの腕を回し、少し強く抱きしめる。
「きゅぅんっ、玲香幸せなのですぅ」
身も心も委ねているような、あまりに無垢な笑顔を覗き込むと、翔子も無意識のうち笑顔になってしまう。
「ねぇ、玲香ちゃん」
「ふぁい？」
「もしプロジェクトが成功したら、玲香ちゃんはどうするの？」
翔子の表情が少しだけ、曇った。けれども玲香の瞳に映ることはなく、それ故でもないだろうが、返ってきたのはお風呂の中らしい気の抜けた返事だった。
「みゅー、玲香は、どこに異動になるのでしょうねぇ？」
「そうじゃなくて。玲香ちゃんだって取り戻したいものがあるから、やってるんでしょ？」
お風呂場特有のエコーがかかった会話。
二人の声のトーンは、若干不一致。相変わらずの玲香に対して、翔子は何か、考えているようだった。
「みゃ？　玲香は違うんです。『そんなの嫌だな』って思って来たんです」
「そっか。なら、成功しても失敗しても、変わらず、ね」
「はいぃ。いつでも私は大好きなお姉様と一緒、ってぁぅー、異動になっちゃったらぁうう」
翔子に抱かれた玲香は一大事に気付き、首をひねり深刻な目で翔子に訴える。
一方の翔子は、玲香の反応についつい笑ってしまい、瞳の翳りが取れてしまう。そのまま首をすくめて、顔を間近に玲香を諭した。
「ふふっ、職場が離れることはあるでしょうけど、大したことじゃないでしょう？」
真横に並んだ顔をもう少し近づけて、やっぱり心配そうな玲香は念押しした。
「みゃぅー、大したことなのですぅ。でも、お姉様は一緒にいてくれるですか？」
「ええ、大切な妹ですもの。ねっ」
「きゅるーんっ、玲香嬉しいですぅ、きゃはんっ」
ぴったりふれあった頬と頬は、お湯とお互いとに暖められて真っ赤だ。
そろそろ温まるのも十分かなと、翔子は玲香を抱いていた腕を解き、ゆっくり浮かせる。
「一緒に取り戻しましょう、世界を」
「はいっ！」
「うん、元気でよろしい。じゃあ、そろそろあがろっか？」
「はいですぅ。ぇいっ、ではでは翔子お姉様、つかまってくださぁい」
先に立ち上がった玲香が、翔子に手をさしのべた。
翔子が手を取り立ち上がると、そのまま二人、洗い場へと戻った。
手をつなぐ二人の姿は、二年前に世界から失われた絵のように見えた。
「さてと、湯冷めしないように上がり湯を浴びないとね」
「はぁいです」

交い締め。
（きゅるるーん、きゃーもっともっとー、はぅーきゅんきゅん）
そして玲香は完全に壊れた。
こんなのは日常茶飯事なのに、未だに耐性なく壊れてしまうのは、なるほど確かにおぼこなのかも知れない。こんなときにはさすがに、ちょっと心の花園が発露してしまうけど。
しかしまともに反応できないことの発露は戸惑いに見え逆に、仕事は得意だけど恋は苦手という役割期待にドンぴしゃではまってしまうわけである。
「えっ、ぁ、……その」
「ハッキリしなさい、女の子でしょ？　ここで仕事してるってことは、そういうことよね？」
そして雛鳥を教育するが如き翔子の態度に、玲香はまたときめきを覚え。
（はわぅー、きゅんきゅーん近い、近いなのですー、ぁわぁわぁあーもうあーぁう）
都合よく現れてしまう雛鳥気質が高まり、彼女の幸せスパイラルは、彼女たちの日常は回り続けている。
「あの、ぇっと、私は、正常な世界を取り戻したいと思って、ここに来ました」
（そしたらお姉様がいらしてきゅんきゅぅんなのですよう）
彼女たちの仕事はあと三十時間ほどで、最初の結論を突きつけられようとしていた。失敗の許されぬ一発勝負に向け、デスマーチ一歩手前の状況を戦っているのは玲香も同じ。その深刻な表情は、まさに状況に立ち向かう指揮官のものである。
はたまたそれは、翔子を考えるあまりかも知れないが。

「あらま、そうなんだ？」
綺麗に整った顔を玲香から離し、翔子の声の飛ぶ向きが変わっていた。
「ぅー、信じていませんね？」
残念そうに翔子を追った玲香の視界では、肩胛骨下まである黒髪が北風に揺れている。
（みゅぅん、翔子お姉様ってばいつもつれないのですよう）
ちょくちょく訪れるチャンスに、謀ったように離れていく。これも彼女たちの日常だった。繰り返される、日常。
「そりゃ、ねぇ。まぁ、いいわ。深くは探らないことにしましょう」
（えー、そんなー、玲香は恥ずかしいけど、いいんですよ？　翔子お姉様になら何でも見せられちゃうんですよ？）
甘いミルクティーを温めかねない微熱が、玲香の身体をいつも通り、おかしくさせている。

「あんたたち、どうしてこんな単純なとこでミスるわけ？　もっぺん小学生からやり直したら？」
玲香が執務室の自席に戻ると、目の前では予想外の光景が繰り広げられていた。予想外と言うよりは、何も考えられない状況で予想できていなかったのだが。しかし今は、優秀なマネージャの頭に戻っている。おかげで怒気を含んだ声に、気が滅入らざるを得ない。
「すみません。でも、もう、限界なんですよ。これ以上働かせたらみんな倒れます」
「んなこたわかってるってのの。それでも、それでもあと一日でリリースなんだから、わかってるでしょ！」

るらしい。
あまりにご機嫌な様子に翔子も嬉しくなり、ぐるりと手を前に回して胸やお腹を洗い出す。
翔子と玲香は身長差二十五センチ、さすがに腕の長さも相当違い、胸に手を回して洗っている最中も、胸を玲香の背中に押しつけることなく済んだ。翔子にとってその行為はちょっと恥ずかしいというか、後ろめたいものだっただけに、小さく安堵している。
（胸を押しつける＝ローションプレイって連想は、私が悪い大人になりすぎているからかしら）
自分の汚れた心にがっかりしながらも、玲香をくるっと回転させ、引き続き片脚ずつ掌を滑らせた。
――……みゅみゅっきゅきゅーん……
一方の玲香は翔子の心中になど気付くわけもなく、きゃぴきゃぴわくわく満面の笑みで玲香の掌の動きを見つめている。
背中越しに予想していた通りの彼女に、翔子はつい、目を合わせて笑ってしまった。
「はみゅ？　どうなさいましたか？　お姉様」
「玲香ちゃん、可愛いなぁーって思って」
「きゅぅんっ、玲香可愛いですか？　可愛いですか？　きゅんきゅんですよう」
両手を自分の前で合わせながら喜ぶ玲香に、改めて翔子は、彼女が妹だったらなと思う。
「おとなしくできて偉いわよー。これからシャワーで流すから、もう少し我慢してね？」
「はぁいお姉様、玲香おとなしくしてまぁーす」
バスチェアから立ち上がると、左手でシャワーを流し、右手を玲香の肌に滑らせながら、ボディソープの泡を綺麗さっぱり流し終えた。
「じゃあ、もう一度温まろっか？」
「玲香も温まるのですぅ」
手にしていたシャワーをフックに戻すと、立ち上がる玲香に手を貸し、そのまま手をつないで再びの浴槽へと歩んだ。
「ダメよ？　飛び込んだら」
浴槽まであと二歩というところで、翔子は玲香に釘を刺した。
「はぅ、バレてしまったのですぅ。魔法使い翔子お姉様なのですぅ」
「そうよ、玲香ちゃんがいけないことしたら魔法でお仕置きだからね」
「みゅみゅぅ、玲香ゆっくり入るでぇすよう」
二人揃って、段差に沿って一歩、二歩と浴槽に入ると、ゆっくりと身体を沈めた。
水に浸かった手を玲香が解くと、ちょっと寂しそうに後を追う翔子の手は気にせず、くるりと身体を回し。
「きゅるるぅんっ、お姉様と一緒なのですぅー」
玲香は浮力を利用して軽々と、自身のおしりを翔子の太腿に乗っけた。
そのまま彼女はおしりをするりと後ろに滑らせ、翔子の下腹部に収める。まだ伸ばしきれない翔子の両足を跨いだ。
（あー、また私、何考えてるんだか……）
その様が、まるで背面座位に感じられてしまうのは言うまでもなく翔子だけだった。
「お姉様のお身体、柔らかくて気持ちいいですぅ、はぅー」

「あと一日、二十四時間なんて無理です。休ませるべきです」
今日の会議で声を荒げていた女の子、三井花羽がチームメンバに説教中のようだ。
眼鏡の奥の瞳をキッとつり上げ、物理的には上目遣いと言える体勢で、花羽は依然説教を続けている。向かいの男性も負けじと応戦している。
さすがにこれだけ派手にやっていると、それどころではないはずなのに周りもつい目がいってしまう。玲香の隣、玲香とセットでプロジェクトマネージャを担当する勅使河原定信も同様らしい。
「無理させている立場の僕たちが言うのも何ですが、三井さんも限界なんでしょうね……」
「原因は何ですか」
「聞こえてくる話からすると、先ほどおっしゃってた、急増中のバグについてでしょう」
向かいの花羽たちの話を聞き、玲香との会話もしながらも、定信の視線は目の前のディスプレイにあった。乱れぬリズムでキーボードを叩き続けている。
『怒るなんて時間の無駄』とでも言いかねない三井さんがあれでは、寝不足も過ぎると言ったところでしょうねぇ」
一方の玲香は気が気でない様子で、視線は花羽と定信を行ったり来たり。
「はぁ、困りました……。えっと、まずは止めなくちゃですよね」
座ることなく席を再び離れると、彼女は花羽たちの間に割って入った。
「ぁ、あの、二人とも、落ち着いて。ね？」
「ちょと何ですか？　早川さんに話はありませんっ」
「早川さん何とかしてください。もう三十時間働いているんです、このままあと一日は無茶ですよ」
喧嘩と言っても間違いではない騒ぎに巻き込まれた玲香は、戦きあたふたしつつも、穏当な方法などあり得るはずもなくピシャリと言い放った。
「静かにしてください！　メンバ全員に今から八時間の休息を与えること。命令です。いいですか、三井さん」
「ありがとうございます！」
「はぁ？　いいわけな――」
「これはマネージャである私の命令です。絶対です」
この十ヶ月間で初めて聞く強い口調に、相当興奮していた花羽も黙りこくった。
翔子相手にきゅんきゅん言っていた人物の言葉とは思えないが、こちらがみなの知っている早川玲香である。有無を言わせぬ表情を崩さず、話を続けた。
「状況はわかっているつもりですが、ひとまず十六時間以上稼働しているメンバは休ませてください。お願いします」
「……わかりました」
不満げに目を逸らしながらも了解を返してきた花羽に、玲香は何とかなったと胸を撫で下ろして場を離れた。
（あー、もう私も寝ようかなぁ）
たった数十秒のことながらとんでもない疲れを覚え、荒れ果てたお肌がまた荒れたんじゃないかなどと思いながら、戻ってきた自席にはまた、座れなかった。
「よお」

「あらま、バレちゃった？　でも気付くのが遅いわ」
蛇口をひねる。
お湯が出る。
「みゃみゃっ、で、でも、えっ！」
蛇口をひねる。
お湯が止まる。
翔子が言う。
「あら、なんで私の顔にシャワーが向いてるのかしら？」
「きゅーっ、お姉様ずるいのですぅ」
シャワー片手の玲香は、悔しそうに立ち上がってじたばたしている。
「そんなに暴れると滑って転んじゃうわよ？　じゃあ、シャワーで流してくれる？」
ここまで来るといよいよ、翔子も耐えられなくなったらしい。穏やかなお姉様顔を崩していたずらっぽい笑顔になると、蛇口をひねる。同時に、目を瞑った。
「えいっ」
飛び出たお湯は真っ直ぐ翔子の顔面に。
目を閉じていた翔子は大振りに両腕を振り出して、玲香の下半身を抱きかかえた。
「残念。お姉ちゃんはおバカさんじゃないのよー」
そのままくいっと顔を上向きにして、お茶目と言うにふさわしい視線を玲香に飛ばした。
玲香の方は明後日の方に水を流すシャワーを握りしめ、やっぱり笑った。……不敵な笑みだった。
「きゅきゅー、隙ありですよー」
彼女はえいっと照準を合わせ直し、翔子の顔面にお湯を浴びせている。
「あらま、玲香ちゃんもバカにできないわねぇ」
水を浴びながら余裕を口にする翔子に、玲香は鼻高々の様子だ。
「きゅるーん、当然なのですよぅ。玲香だっておバカじゃないのです！」
本来の目的を忘れ、勝ち誇ったように仁王立ち。そんな玲香がバカじゃないのかは多少の疑問も残るが。翔子も満足そうに笑顔で玲香を離れ、今度こそシャワーで洗い流してもらうことにした。
翔子の身体が綺麗になると、次は、玲香の番。
「きゅんきゅんっ、次は玲香を洗ってくださいですぅー」
よほど楽しみと見える小気味よい動きで、玲香は背を向けバスチェアに座った。
「はいはい、じゃあ、洗うわよ？」
「はーい、お願いしまぁーす」
先ほど玲香が翔子にしたのと同様、背中から掌を滑らせ洗い始める。
――にゅるにゅるすりすり
――……
意外にも、玲香はおとなしい。
翔子は玲香がきゃっきゃと騒ぐだろうと思っていたので、ちょっと落ち着かない。しかしよくよく耳を立ててみると、黙っているわけではなかった。
――にゅるにゅるすりすり
――……ふふんきゅっきゅーっ……
どうやら小さな鼻歌交じりに、洗われていることを楽しんでい

「ではぁ、右脚なのですーっ」
玲香は向かいにあった右脚を引っ張り出して、足首から丁寧に洗い出した。
普通逆じゃない？　と思いながらも、屈んで一心不乱に掌を滑らす玲香に水を差すのも可哀相かなと思う。そして、これはいたずらのチャンスだなと思いついてしまう翔子だった。
「えいっ」
「ひゃうっ」
屈んでがら空きだった玲香の両脇腹を、人差し指でツンツン。
「にゃ、にゃにするでぇすかーぁっ」
「ふふーん、何もしてないわよー」
「お姉様の嘘つきぃ」
「あら、何のことかしら」
「みゅー、じゃあ仕返ししちゃいますぅっ！」
玲香の手が翔子の脚をにゅるんと滑り上がり、同じく脇腹をツン。
「……あら、どうかしたの？」
「ふみゅ？　えいっ、つんつん。……えーっ、翔子お姉様ずるいですぅよ」
「お子様とは違うのよー。ほぅら、左脚も洗うんでしょぉ？」
「みゅぅ、そうなのですけどぅ。みゅみゅぅ、悔しいですぅ」
翔子の下腹部から見上げていた玲香はしょんぼりと項垂れ、にゅうっと身体を引いて、元の脚を洗う体勢に戻っていった。
「ではぁ、左脚洗うのですぅ」
「はい、お願いねっ」
首を軽く傾げてにこっと笑う翔子に、嫌みとはいかずとも、勝ち誇った感を感じて余計にしょんぼりする人もいよう。もちろんそんな意図などない。だから玲香も、いつも通り。
「きゅるーん、綺麗にしちゃいまぁすっ」
破顔し蕩けきった表情でまた、掌を滑らせた。
程なくして翔子を洗い終えると、玲香は満足げに上体を起こし、にこっと笑みで合図した。
「ありがと。じゃあ、シャワーで流してくれる？」
翔子はフックから取り上げたシャワーヘッドを玲香に渡すと、蛇口をひねった。何も、確認せずに。
「みゃぅっ」
勢いよく放たれた水は水芸のように垂直に駆け上がり、玲香の顔面を捕らえたのだ。
「はみゅっ、ふゃ、ふぁ、とょととみぇてーっ」
慌てふためく玲香を見ても翔子は表情すら変えることなく、蛇口を逆側にひねった。
当然のように水が止まると、なおも穏やかな翔子が一言。
「じゃあ、シャワーで流してくれる？」
蛇口をひねる。
お湯が出る。
「ふみゃぁうっ、にゃぅーとととみぇれぇっ」
蛇口をひねる。
お湯が止まる。
翔子が言う。
「じゃあ、シャワーで」
「みゅ、もう騙されません！　お姉様っ！　意地悪はめっなのですぅ」

別室でコード監査を指揮しているはずの生稲総一（いくいなそういち）がすでに、彼女の席に座っているではないか。
「よお、じゃない。どいてよ」
「おいおい、幼馴染みにそりゃ冷たいんじゃないか？」
「冷たくもなるよ。メールチェックしたら、もう、シャワー浴びて寝たい……」
本当に構っている余裕がない疲れを感じる玲香に気付いてか気付かないでか、総一はひょうひょうと続けた。
「ま、今の一働きはお疲れ様だな。端から見ると小中学生の言い合いだったが」
「はいはい、どーせぺったんこのちんちくりんですよー」
「三井の方は、胸だけあるけどな」
「……。で、何しに来たの？」
いつもだったら言い返すシーンでも、今日の玲香はぐったり無反応。立ったまま自分の端末を引き寄せ、メールの未読をチェックし出した。
しかしこの程度は予想通りと、言葉を続ける。
「いや、晩飯食ったかなと思って」
「食べてるわけないでしょ」
引き続き予想通りらしい回答を得た総一は、くっと首を伸ばして、机の向こうにも誘いを投げた。
さっきの一件で相当頭に来ていそうな彼女に、逆撫で必死の緩い声で。
「おーい、三井、一緒に飯食いに行こうぜ」
「そんな暇ない」
彼女は視線すらよこさずに断ってきたが、そこは彼、やはり織り込み済みなのだろう。手に持っていた書類入れから秘密兵器を取り出した。
「んー、ここに三井がコミットしたコードのバグ一覧がだな……」
「ふぇ？　そ、そんなバカな、ちょ、ちょと見せなさいよ」
ガバッと食いついた三井に満足そうな総一は、仕上げに玲香の視線も一本釣り。
「まー、あいつにはこれより効くわけだ」
「な、なんでそんなもん持ってるの……」
「監査だからな、何でも持ってるんだよ。ちなみにもちろん使用済み」
彼の取り出したるは、このプロジェクトで唯一花羽だけが着こなせるであろう、ずば抜けたサイズのブラジャーだった。
「いや、俺が使用済みってことじゃないぜ？」
「……一応私も、女の子なんだけど」
しょうもない冗談に頭痛がぶり返しそうだと、玲香はこめかみを押さえた。

食事から戻り席に座ると、強大な眠気が玲香に襲いかかってきた。
ついついステーキセットを、それも大盛りで食べてしまい満腹の彼女である。日常となった寝不足と相まって眠くて仕方ない。
（あー、今日はもう、寝ようかなぁ）
眠くて何もできないのでは、ここにいても仕方がない。端末をシャットダウンすると、たまたま不在だった定信の机に「お先に失礼します」とメモを残し執務室を出た。
ひんやりとした空気が気持ち慰労かを歩きロッカールームへ。扉を開けると先客、翔子がいた。
「玲香ちゃんも帰り？」
予想外のその声に、気怠い身体もいきなり元気だ。
（きゃぅんっ、翔子お姉様ぁ、やっぱり私はいつでもお姉様と一緒じゃなきゃダメなのですよぅよぅ）
玲香は水を得た魚の如く瞳をキラキラさせて、作業着を片付ける翔子を見つめてしまった。
「ん？　どうしたの？」
なぜか見つめられていることを翔子が問うと、玲香はやっと、我が身の動きに気付いたらしい。
「ぇ、あ、その、いいぇ、何でもありませんっ」
（きゅるーん、やってしまったのですぅ。疲れていたから？　ううん、この薄暗い部屋で二人きりなのれすぅ、きゃーっ、もうこの先は言えないのですよぅ）
普段は表向き平静を装う彼女だが、やはり疲れてもいたのだろう。微笑む程度に抑えるべきところで、にやにや。
そんな彼女をどう見ているのか、翔子はあっさりと話を戻す。
「あら、そう？　ところで、これから帰り？　それともシャワーかしら？」
（きゃんっ、そ、そんなぁ、翔子お姉様とシャワーだなんて、ひゃんっ、ダメじゃないですよぉにゃはー。って、ぁーいけないいけない、しっかりしなくちゃ嫌われちゃいますの！）
身も心も壊れそうな彼女だが、まだ多少の正気が残っていたのかも知れない。ぐっと拳を握り力を巡らせると、いつもの三割引ぐらいではシャキッとした。
「はい、シャワーを浴びようかと……。今日もここに泊まりますので……」
（ぇと、ぁの、一緒に寝ましょう？　なんて期待してるんですにょーにゃはー）
ちょっと物憂げに言う自分が予想以上に高得点だと思ったのか、玲香はまた変な妄想に引きずられそうだ。
しかし、現実は厳しい。翔子は実にあっさりと話を続ける。
「やっぱりね。じゃあせめて、ちゃんとお風呂に入ろっか」
（はぅー、そんなぁ、翔子お姉様ってば冷たいですぅ）
妄想を至極当然に修正されたと思った玲香の顔は、ちょっと落胆気味。
（……ありゃ？）
しかし、程なくして気付いたのだろう。
（ふぇ？　もしかして一緒にお風呂なのですか？　れすか？　きゅるーん、そ、そんなぁ、ダメ、ダメなのですぅ恥ずかしいのですー見てくださいなのですー）
「はいはいはいはい、行きます行きますーぅ」
その現実は玲香の疲れを飛ばすに十分だったが、他の何かも飛

にやりと聞こえてきそうな一言。
「はわぁ、掌ですかぁ。……ふみゅ、て、てのひられすかっ？　ぁわ、ぁぁ、わわわわみゅ、ふぇっと」
そして、玲香は予想通りの慌てふためきように、ついつい意地悪して遊んでみたくなるのだ。
「あら、どうしたの？　玲香ちゃん」
「みゅぅ、だってだってですのぉ、お姉様のお身体を、そにょ、はみゅぅ、玲香の手で洗う、な、ぁんてっ」
（あぁっ、なんて可愛いのかしら。今すぐぎゅーってしたくなっちゃう）
さすがに口に出しては言えないが、玲香が可愛くてたまらない。
翔子お姉ちゃんの望みはあながち冗談でもなく、こんなに可愛い子が妹なら、一緒に生活してくれたなら、毎日きっと楽しいだろうなと本気で思っていた。
とは言え、思っていることを全部口にしないのは翔子らしい。それが災いしてか、災い転じて福となしてか、クリスマスイヴまであと二十六時間の今、玲香とじゃれ合っていられた。
「えー洗ってくれないのー？　なぁんてね。他人の身体を素手で洗うのは、ちょっと勇気いるものね」
「はみゃぅ、そうなのですよぅ。恥ずかしぃのですぅ。でもでも、翔子お姉様は他人なんかじゃないのですっ！」
――ぴとっ。
「お姉様の大切なお肌のため、玲香がんばるのれすっ！」
彼女にしてみれば本気も本気の意気込みで、にゅるにゅると背中に置いた両手で円を描く。
「っ、ちょっとこれ、くすぐったいかも」
やがてその円は大きくなり、脇の下をにゅっと通過し、お椀型と言うにふさわしいふくらみを掌でくにゅっと押さえた。
「はいはいお姉様、前も失礼いたしますですのー」
「きゃっ、ちょと、そんないいのにっ」
身体を洗うとなれば当然背中だけではないのだが、翔子はそこまで考えていなかった。
今、自分の胸を手にされている。つまりボディソープでぬるぬるの背中を、玲香の胸が滑り回っていることの方が気になる。いったいどこの風俗よと苦笑しながらも、きゃっきゃと騒ぎながら身体を洗ってくれる玲香を止めるのはもったいないとも思う。
「ダメですよぅ、隅々まで綺麗にするのでぇす。はわ？　お姉様のお胸もあんまり大きくないのですね？」
「もうっ、余計なこと言わないのぉ。洗うのに大きさなんて関係ないでしょ？」
「ふみゃ、でもでも洗い残しないようにきゅきゅするですー」
「はぁ、仕方ないわね。好きにしなさい……」
「わーい、きゅきゅきゅー、好きにするのでぇす。次はお腹ぁ」
背が高い、胸が小さい、翔子のコンプレックスはその程度のものであったが、玲香に触らせたら何を言い出すかわからない。「お腹も柔らかですぅ」とか言われた日にはどうしたものかと内心冷や冷やしながらも、自身を彼女に委ねた。
「ようしっと。次は脚を洗うのでこっち向いてくださぁい」
「はいはい」
翔子の背中越しにぴったりくっついていた玲香が離れると同時に、翔子は身体の向きを一八〇度。流れたボディソープで滑りやすくなったバスチェアの上を、すーっと回転した。

ばしてしまったらしい。
仕事をともにして十ヶ月以上、翔子も初めて見る笑顔だった。
「あらあら、玲香ちゃんってばとっても可愛いのね。さ、行きましょ」
キラッと微笑み部屋を出て行く翔子が、玲香にはもう見えていなかった。
（きゃーん、玲香可愛いですか？　可愛いですか？　はぅー、そんな可愛い玲香を好きにしてく・だ・さ・い・っ♡　みゃーですのー）
ロッカーから洗面用具をひったくると、コートを着るのも忘れて、翔子の後ろを小走りに追った。

二人の行き着いた先は、都内らしく近場に何件かある銭湯の一つ。何の変哲もない銭湯、だが。
（はふぅっ、な、な、なーダメですの翔子お姉様ってばいけないですの！　はわはわはわわぁー見えてますぅ全部見えてますぅー）
お風呂に入る前から顔がゆだっている玲香にとって、きっとそこは天国だったろう。
隣で服を脱ぐ翔子が気が気でない。もうちらちら見ているとか言う状況ではなく、ちらちら何とか視線を戻しているといった具合だ。
（はわー、綺麗ですぅー）
玲香がついに視線を戻さなくなったとき、隣の翔子は、一糸纏わぬ姿で真っ白な素肌を曝していた。
「もう、そんなにじろじろ見られると恥ずかしくなるでしょ」

「みゅ、ぁ、はわ、済みません」
（でもでもー、そんな綺麗なお身体見ずにはいられないのですぅ）
他のお客さんはいないため翔子も気にせず、裸のままで玲香に手を伸ばした。
（みゃ、みゃぅわっ、なな何をするですかーぁっ）
玲香は気が動転して顔が反応しきれない。そんなことお構いなしに翔子の手は迫り、ついには玲香を捕らえた。
「玲香ちゃんはお疲れのようだから、私が脱がせてあげるわ」
翔子はにこっと微笑み、ゆっくりとブラウスの前立てに手をかけた。
（ひぁっ、そ、そんな、ダメです、あーお願いですから私を脱がしてくださいぃ）
真っ白な指に襲われ壊れてしまった玲香の、ブラウスのボタンがゆっくりと外されていく。
「んー、やっぱり逆向きってのは外しにくいわね」
自分と同じ左前の合わせに手こずりながらも、玲香にしてみればあっという間に外れてしまった。
（は、はわ、はわー、あ、ああわ、わあ）
彼女はついに言葉を口にすることを忘れたばかりか、心の中でも言葉を紡げぬほどの慌てぶり。
翔子の笑みに含まれる不敵な笑みは、何を思ってのことだろうか。何にせよ彼女は手早い動作を止めることなく、目の前の玲香をくるりと回して、ブラウスを腕から抜く。抜き取ったブラウスを簡単に畳みロッカーに収める。収めてしまった。
（ふぇぁっ？　しょ、翔子お姉様と一緒ぉーっ！）
こともあろうに翔子自身が脱いだ服がすでに入っているロッカ

自分が、玲香に妹になって欲しいなんて言ったことも。
だから、どうしたものかと、小さく形のよい頭を撫でようとしたとき。
「ふみゃぅ、翔子お姉様は、素敵な、お姉様なぁのっ！」
くぁっと胸元に大輪の花が咲いた。
呼応するように、翔子の言葉も開花した。
「私なんかの妹に、なってくれるの？」
「はいっ、玲香は翔子お姉様の妹なのですっ！」
二人はまるで仲睦まじい姉妹のようで、姉妹とは思えぬ視線を交わしている。
二人にとっての姉妹は、二人の関係そのものなのだろう。
翔子は淀みなく小首を傾げ、玲香の頭を撫でた。
「あらま、せっかくお風呂に来たのに冷えちゃったら大変。身体、洗っちゃいましょ？」
「はぁい、ではでは玲香が先に洗いますのぉ」
玲香はひょいと翔子の太腿から降りると、手に持っていたタオルにボディソープを取り、くしゅくしゅと泡立て始める。
「じゃあ、お願いね」
そう言いながら玲香の行動を目に入れながら、翔子は背を向けた。
「玲香ちゃんは普段から、タオル使って洗うの？」
「んーと、あの、なんて言うんですか？　こう、ぁみみたいな、タオルみたいな……」
「ああ、ナイロンタオルね」
泡立てたタオルを目の前の背中に置いた玲香は、一生懸命に洗い始めた。

きっとそれなりに力を入れているんだろうなと感じつつも、心地よく緩い摩擦に翔子はにやけてしまう。
「はいぃ、多分それですぅ。よく泡立って便利なのですよぅ」
背中越しの玲香も、顔も気持ちも甘々のにやにや。
彼女はさっきからそんなだから、翔子にとっても予想しやすい。その甘々な顔を思い浮かべると、翔子もにやけてしまうのである。
「そうなのよねぇ。でもあれ、皮膚にはあまりよくないんだって」
「ふぇ？　そうなのれすか？」
「そう聞いたことがあるわ。よほど強くこすったらでしょうけど、色素沈着が起こるって」
「はわわわわ、明日からやめるですか？」
「んー、普通に使う分には大丈夫じゃないかしら。私も、便利だからスポンジ使ってるし……」
たわいないおしゃべりをしながらも、ほどよくを通り過ぎて嬉しそうな二人。
よりによってここはお風呂場で、二人とも素肌を曝している。それを差し引いても、女の子同士でなければ恋人にしか見えないだろう。
「ふみゅ、スポンジもダメ。じゃあ、やっぱりタオルがいいですか？」
けれども、心の共有具合はやっぱり姉妹なのだろうか。
むしろ、玲香がわかりやすいだけなのだろうか。
表情だけでなく次の反応も当然予想している翔子が、また一段とにやけを深め、待っていた質問に答えた。
「一番いいのは、掌だそうよ」

ーへ、玲香の服を収めているではないか。憧れの翔子と一緒。あまりの衝撃に玲香の言葉も戻ろう。
「ぁ、あの、翔子さん、その、服、一緒で、すか……？」
「あら、いけなかった？」
後ろを向き俯いたまま言葉を発する玲香に、翔子の顔は見えなかった。そして返ってくる言葉から、言葉以上のことも見いだせない。それは玲香の気が動転しているからかも知れない。そう、動転してなければ、彼女がこんなことを言うはずがないのだ。
「い、いえ、その、ぅ、嬉しいですっ！」
勇気を出して伝えた言葉がこんなだったと、正気の玲香が思い出したらどう思うのだろう。
「ふふっ、そんなに喜ばれちゃうと、私も嬉しいわ」
後ろにいる翔子は、今も正気故に深い意味なく言葉を返した。が、彼女にはそう聞こえなかったらしい。
（きゃーっ、翔子お姉様ったらぁっ、玲香きゅんきゅん止まりませんよーっ）
予期せぬ急接近、しかも今、脱がされている。この状況に顔だけでなく玲香の全身が、紅潮していく。そのことに気付かぬ翔子ではないだろうが、相変わらず淡々としているのが玲香をさらに興奮させてしまう。
（あんっ、翔子お姉様ってば、どんなときでもお姉様なのですね、あっ、そ、そんなぁー）
翔子は桜色のブラジャーに手をかけ、ホックを外した。これまた手早く丁寧に畳むと二人のロッカーに収める。続いてスカートに手をかけ、同様に、淀みなく脱がせた。
ホックを外しファスナーを下ろせば、黒いタイトスカートはもう足下。この辺でそろそろ、淀みなく進む時間もおしまいだろう。思考能力をほぼ失った玲香にも気付くことがある。そう、次に脱がされるものが何かと言うことだ。
（えと、その、やっぱり、ぁーもう早く脱がせてくださいですのぅっ！）
気付いた上でなお望む彼女に、翔子は気付かなかったのだろうか。全く淀むことなく、翔子に伝えた。
「さて、ここからは自分で脱げるわね？」
そして彼女はライトベージュのパンティストッキングを脱がせ残したまま、ロッカーの鍵を玲香の手に握らせる。
「風邪引かないうちに入ってくるのよー」
その一言残して、先に浴室へと入っていった。
一方の玲香は、掌の鍵にも気付かず、まごまご何かを言いたそう。
（ぁ、あの、お姉様っ、ぇと、あの、その、はしたなくてごめんなさいなんですけどぉ、）
「わ、私、ぬぬ脱がして欲しいんですっ！」
振り返り、ついにはその言葉を声にしてしまうも。極度の緊張から背後で起こったことに気付かなかったのだろう。翔子はもう、扉の向こうだった。
「……はぅ～、翔子お姉様の意地悪ぅ」
仕方なしに自らの手でストッキングとショーツを脱ぎ、ロッカーに収める。もちろん、そこでとんでもない葛藤があるのだが。
「あ、あぅ、これが翔子お姉様のお洋服なのですねっ。きゃんっ、きゅんきゅんですのー。で、でも、今はそれどころではありませんっ。いゃんっ、あの向こうには、お姉様がいるのですっ。玲香

か言えないその発想。
普段の翔子ならば冗談として言ったに過ぎない科白だろうが、今の翔子が言うと、思考回路が壊れてしまったようにしか聞こえなかった。つまり、玲香とお揃い。
「きゅぅんっ、ホントですかぁ？　はいはぁいっ、玲香、お姉様の妹なのですぅ」
嬉しそうに翔子の腕の中にきゅっと収まる玲香。そのあまりの可愛さに、翔子ももう止まらないらしい。
「あらぁ、じゃあ今日から玲香ちゃんは今日から私の妹ねっ」
「きゅーん、い・も・う・と、い・も・う・と・っ！　きゅんきゅんっ！」
「やぁん、こんな可愛い子が妹だなんて、お姉ちゃん嬉しいわぁ」
太腿から胸まで素肌をすり寄せていた彼女たちが、ついにはお互いの頬をすりすりしている。
今この光景を、誰かが見たらちょっと驚くかも知れない。けれどもすぐに、仲がよすぎる姉妹として微笑ましく見守るだろう。身体も心も、本当に姉妹みたいな二人。
だからこそ姉がわずかに眉を顰めたのにも、お姉ちゃん大好きな妹はしっかり気付いてしまうのである。
「ふみゅ？　翔子お姉様、どうなさいました？」
「あらら、わかっちゃった？」
「はいぃ、お姉様のお顔は一瞬だって見逃さないんですのっ」
「玲香ちゃんは妹なんかで、ホントにいいのかなって」
「っ――」
今の今まで、玲香にそんな気はなかった。
違う。
忘れていたわけでもない。忘れられるわけない。
「姉妹」に理想を重ねていた。彼女にとっての「お姉様」は翔子であり、姉ではなかった。
彼女が、今まで、そしてこのあとも、戦場と化した職場で戦う理由。
玲香は突然、自身の水底に引き戻された。
（ふみゅ、みゃ、あ、あの、お姉様、翔子お姉様、お姉様ぁっ、みゅぅっ）
明確な言葉として思考はできていなかったが、心は、目を覚ました。
「あっ、ごめんなさい、やっぱり、嫌よね。そうよね、私の妹なんて……」
玲香の変化は傍目にも明らかで、翔子は踏み込みすぎていた自分に気付き、フォローを入れた。
けれども、それは逆効果。玲香にとって幸か不幸か、彼女の水底に澱むものに、翔子は気付いていない。
「ふゅみゃっ、ち、違うんですぅ、その、みゃの、妹になれたら嬉しいんですっ、きゅぅんってしちゃんです、でみょ、あの、嬉しくて、きゅんっきゅんって」
いつの間にか微笑みは消え、一生懸命言葉を紡ぐ可愛らしい瞳さえ隠れた。
玲香はぎゅーっと、翔子の胸に顔を埋めている。
「……ありがと。私なんかが、お姉ちゃんになれるのかなって思ったの」
翔子には少しわからなかった。
玲香が、嬉しいのにぎゅっと俯いていることが。

と一緒にぬくぬくなのですぅきゃー言っちゃいました言っちゃいましたぁっ」
周辺物より本体。欲望の向いた方向は極めて正しかったのだが。
欲望により身体の制御は壊されたようだ。彼女は本当に「言っちゃいました」。

浴室の中は湯気で真っ白。なんてむしろ危険な状況であるはずもなく。
多少の湯気はあれど、お互いの顔も識別できれば、お互いの肌の色までしっかりわかってしまう。
「きゅー、翔子お姉様と一緒なのですぅ、ふるふるーっ」
「こらこら、胸の間でふるふるしないの。くすぐったいでしょ」
ましてやこの至近距離なら。
玲香は翔子の膝に座り、胸にすっぽりと収まっている。
「玲香は」と言うのに少々戸惑いを覚えそうな今の彼女だが、翔子は全く気にしていないらしい。むしろ気に入ったのか、甘ったるいやりとりを持ちかけている。
「玲香ちゃんってば甘えんぼさんなのね」
「はぁい、甘えんぼさんなのー、ふるふるーっ」
玲香が首を左右に振ると、ブラウンの髪の毛が翔子の胸の谷間を行ったり来たり。まるで掃除をしているかのようだ。
「めっ、おとなしくしなさい」
翔子はその心地が気に入っているのか、口ではやめろと言いながら、腕の中の柔肌にするすると指を滑らせ。玲香が「ひゃんっ」と反応してはまた首をふるふるさせる繰り返し。
「玲香ちゃんって軽いのねぇ、ほうら、持ち上げちゃうぞーっ」

翔子は彼女の胸元で遊んでいた手を引っ込め、脇の下まで引き戻すと、ひょいっと押し上げた。
「きゃっ、高い高いですのー、お姉様だぁい好きぃー」
太腿を水中に残したまま浮かび上がった彼女が、くいっと腰をひねり、胸を翔子に向かい合わせる。そして「えいっ」という声が聞こえてきそうな感じに跳ねると、翔子の首に取り付いた。
「あらあら、可愛いお胸さんっ」
翔子は嫌みなく感想を述べると、自分の胸にぶつかってきた玲香の胸に顔を移し、ぺろっと舌を滑らせた。
「ひゃうんっ、ダメですよぅ」
「と、言う割には、嬉しそうな顔してるわよぉ？」
「うー、翔子お姉様の意地悪ぅ。お姉様になら、何されてもきゅんってしちゃうってわかってるくせにぃ」
もっと舐めてと言わんばかりに、くいっくいっと胸を押しつける玲香に、翔子はついつい応えてしまう。
「あっ、にゃっ、もうダメなのですー、お姉様ぁー」
甘ったるい猫撫で声を出す彼女に、翔子はついつい気分が乗ってしまう。
翔子にとってそれは特別な行為でないつもりだったが、徐々にエスカレートすれば、どうなるのだろう。妙な期待が芽生えていることに、彼女の意識は気付いていたのだろうか。
「玲香ちゃんってばなんて声を出してるの。お姉ちゃん止まらなくなっちゃうぞ？」
そう言いながら、彼女は自分を抑え込むように、玲香を少し押し下げて、ピンと伸ばした太腿の上に跨がせた。
「ふぇ、だ、だってぇ、翔子お姉様のぺろぺろできゅーんってな

を振る。初めて使うコンディショナーなので具合はわからないが、流すまでに多少待つにも、おしゃべりはちょうどいいと考えた。
「ほらほら、気にしない気にしない。玲香ちゃんは普段、使わないの？」
「はぃ……。その、短いので……」
「そうねぇ。髪も綺麗だもんねぇ。でも、使ったらもっと綺麗になれるかも」
「ふみゅぅ、そうですかぁ？　でも玲香なんか……」
ダークブランの髪は地毛なのだろうか。手入れに頓着しなさそうな割に、生え際の色むらもないなと、翔子は羨ましくも感心していた。
一方その髪がさしてお気に入りでもなさそうな玲香に、翔子はふと、仕事を思い出す。
（私だって、自信なんかないわよ……）
けれども、翔子はその気持ちを表に出すことはしない。だって、玲香ちゃんのお姉様だもの。そう思ったのかは、自分でもわからなかったが。
「めっ、暗いの禁止。女の子は明るく可愛く、ねっ？」
「は、はぃっ。じゃあ、明日から私も試してみますのっ！」
明るくかけた言葉に、明るく返ってきた答え。
状況に満足したように、あるいは状況を打開するかのように、翔子はシャワーヘッドを手にした。
「うんうん、その意気その意気っ。はーい、流しまぁす」
「はーい」
あっさりと濯ぎ終えると、いよいよお楽しみだ。

玲香はしっかり学習して、後ろを向いたまま。それでもまだかまだかと楽しみに待っているのが、後ろからでもわかりそうだ。そんな彼女を目の当たりにすると、翔子もますます楽しくなってきてしまった。
「じゃあ、髪上げるね？」
「はぁい、お願いしまぁーす」
翔子はそんな大層なことでもないのだけれどと楽しげに苦笑しながら、やっぱり他人にやるとなると少々勝手が違うなと慣れない手捌きでタオルを巻いてあげる。
「はいっ、できあがりっ」
玲香はいかんせんショートヘアなので、実際に髪を持ち上げる効果はあまりないが、それでも耳が外気に曝されれるのがちょっとだけ新鮮。まさに美容院でシャンプーしてもらったあとのよう。でもそんなことより。
「きゅーっ、翔子お姉様とお揃いなのですよぅ」
玲香は盛大に喜んで、ついさっきもあったようにぴょんと玲香の首に抱きついた。
「きゃっ、ちょと、玲香ちゃんってば」
「きゅるんっ、お姉様ぁっ」
翔子は滑りやすいバスチェアの上でよろけながら、何とかかんとか玲香を支え、お姫様だっこで彼女を自分の太腿の上に乗せた。
その絵に翔子自身嬉しくなってしまうも、斜に構えた感想を浮かべることもなく、まるで玲香のように考え、口に出す。
「可愛いわねぇ、玲香ちゃん。そうだ、本当に私の妹になっちゃおうか？」
場の雰囲気に、いわゆる空気に、つまりは玲香に毒されたとし

っちゃったんだもんっ」
「あらまぁ、ちっちゃいけど敏感なお胸なのね」
焦点をわずかに外し乳首を見つめる翔子の瞳が、玲香にはとんでもなく蠱惑的に映る。
玲香は魅入られぼーっとすると、すらりと伸びた翔子の指先が、わずかなふくらみの輪郭をはらりと撫でた。
「きゃうんっ」
その悲鳴の小ささが、逆に卑猥に響く。
けれども翔子にはそう聞こえなかったのだろうか。行為を続けることなく、玲香をぎぱーっと、浴槽から持ち上げた。
「じゃあ、洗いっこしよっか？」
「やったー、じゃあ、玲香が先にお姉様を洗いまーす」
まるでその先を期待していたかのように見えた玲香だが、感じていたものに正直なだけだったのだろう。翔子の提案に喜び、彼女の腕から離れると、バネが放たれたように洗い場へと飛び出していった。
「ちょ、ちょと、気を付けなさいよー」
そう言いながらも少し急ぎ足で、翔子も後を追っている。
玲香の無邪気な笑顔は、翔子にも伝染していた。
「はーい、お姉様、お背中洗いますねーっ」
「あーっちょっと待って、先に髪を洗ってもいいかしら？」
依然貸し切りの洗い場、背中を前にわしわしと手を構えている玲香を制して、翔子は二本のダッカールを外す。
「あぅ、気付きませんでした。じゃあ、髪から洗いまぁす」
「ありがとう。じゃあ、頭を洗ってくれる？　髪のこっちの方は自分で洗うから」

頭頂からふぁさっと落ちた黒髪を、翔子は自身の手で首の横を通し、前に流した。
「ふみゅう、髪が長い人はそうやって髪を洗うのですねぇ」
「そうよー、と言っても、他の人のは見たことないけど。私は全部前に持ってきて洗うかな」
「では、玲香が頭の方を洗うのでぇす。しゃんぷーしゃんぷーっ」
言うまでもなく玲香はとても上機嫌。手元に据えたシャンプーボトルの頭をリズミカルにポンポンと二度押し、わしゃわしゃと掌で泡立てている。
一方の翔子も、自身でも意外なほど上機嫌。そもそも好きで玲香と銭湯に来たとは言え、玲香と洗いっこするとは思ってもいなかった。普通であれば逆に引いてしまうようなシーンだが、彼女らしく、単純に楽しんでいる様子である。
「ごしごしー、どうですかぁ？　かゆいところはありませんかぁ？」
「はーい、大丈夫ですよー。シャワー流してくださーい」
「はーい、流しまーす」
まるでおままごとのようなやりとりをしながら、玲香はシャワーが放つお湯の行き先を、翔子の頭に定めた。
濯ぎ終えると「えへん、ちゃんと洗えたでしょ」という玲香の姿が微笑ましい。さすがに髪が長くて濯ぐのに時間がかかってしまい、やっぱり最後は翔子自身がシャワーの握ったが、細かいことは気にしない二人である。
「ありがとうね。じゃあ次は、玲香ちゃんの番ね」
翔子もいよいよ乗り気で、長髪をタオルで持ち上げる手にも心なしか力が入る。

さて、玲香ちゃんを、と翔子が思うと、なぜか玲香の目線が自分を向いている。
「あれ？　どうしたの？　玲香ちゃんの番だよ？」
玲香はぽかんと口を開けて、翔子の方を見つめているのだ。
「はわー、なんか美容師さんみたいなのですぅ」
「ああ、そっか、玲香ちゃんは短いから、普段はこんなことしない？」
翔子はタオルを巻いて持ち上げた髪を指さしながら、こくんこくんと頷く玲香を見て、なるほどねぇと単純に感心していた。
「美容院でしかやってもらったことないですよぅ」
「そっかぁ。じゃあ、やったげよっか？」
「きゅーっ、ホントぉ？　ありがとうですぅ」
目をキラキラさせて大喜びの玲香に、口をついて出た提案ながら「いいことを言っちゃった」と翔子の頭の中もキラキラだ。
今更ではあるが、もうすっかり、「職場の同僚」という線は越えていた。そもそも、ただの同僚が一緒にお風呂に入るのかは疑問であるが、それこそ今更の疑問だ。
「うん、じゃあね、玲香ちゃん、向こう向いてね」
「はぁーい」
今度は翔子が玲香の髪を洗い出した。
ショートボブなので扱いにくいことはないが、翔子も他人の髪を洗うという経験は持ち合わせていなかったらしい。ちょっとぎこちなさを見せている。しかし数分もすれば洗い終え、濯ぐためにシャワーを向けていた。
シャワーのお湯が途切れた瞬間、玲香は突然一八〇度回転。
「はいはーい、玲香の髪もお姉様みたいにしてしてーっ」

にかっと笑う玲香に翔子も微笑みをこぼさずにはいられなかったが、そこはお姉様らしく。
「あっ、もう、水が跳ねちゃうでしょぅ。ダメよ？　女の子はお行儀よくしなきゃ」
「はわわぁ、ごめんなさいですのぉ」
「よしよし、ちゃんと反省なさいね？　じゃあ、もう一度向こうを向いてね」
「はーい、ぃ？」
「玲香ちゃん、さっき忘れたでしょぉ？」
「……ふみゃ、はわっ、はわわわーっ、ごめんなさいですぅっ」
自分の髪にコンディショナーを付けている翔子に、玲香ははっと気付いたらしい。そこでまたもやくるりと回転しようとする彼女を、翔子は制した。胸をぐっと玲香の背中に押しつけ、手で頭を押さえて。
「ほぅら、今は向こうを向いたままでしょ？」
「でもでもぉ」
自分の失敗のせいでお姉様が大変なことに。玲香の頭の中は大慌てだ。
冷静に考えればコンディショナーの有無程度、やり直しはいくらでも効く、些細なことなのだが。玲香はそれだけ、翔子に一生懸命なのだろう。
「いいから、ね？　一度くらいコンディショナーなしでも問題ないわよ」
「はわわぁ、ごめんなさいですぅ……」
引き続きしょんぼりしながらも、隙あらば振り向いてやり直そうとする玲香を制し、翔子は気が収まってくれるよう新たな話題